Ⅲ　研究開発の内容

１　課題研究の取組

（１）教育課程編成上の特例

ａ　学校設定教科・科目の開設

普通科第２・３学年文系クラスを対象に、「総合的な学習の時間」（第２学年の１単位及び第３学年の１単位）・「社会と情報」（第２学年２単位のうちの１単位）を学校設定科目「スーパーグローバル（ＳＧ）探究」（第２学年２単位及び第３学年１単位）に代替する。

教科名	スーパーグローバル（ＳＧ）
科目名	スーパーグローバル（ＳＧ）探究
開設する理由	客観的な文献や資料等をもとにしながら、論理的に思考し、表現する力を養うと同時に、将来の地域・社会のリーダーたり得る人材として、生まれ育った地域や国際社会が抱える様々な問題を自らの能力で解決する使命感や、グループでの協働的な学習を通じて主体的・積極的に学習する態度を育成するために、この科目を設置する。各教科の学習で得られた様々な知識を応用し、ディベート演習や課題研究など、より高度で発展的な学習活動を実施するとともに、パソコンを使ったプレゼンテーションなども実践する。 この科目の設置により、従来の「総合的な学習の時間」ではできなかった幅広い活動を、教科の枠を超え、総合的に行うことが可能となる。
科目の目標	生徒自らが課題を設定し、グループの協働的な学習を通じて論理的に思考し、表現する力を養うとともに、その成果を校内のみならず、国際社会に積極的に発信できる実践力の育成を目指す。
内容	（１）ディベート演習 （２）国際的な社会課題についての講義 （３）課題研究 （４）研究レポート作成 （５）発表用資料作成とプレゼンテーション （６）関係諸機関職員・大学院生・留学生等との意見交換 （７）関係諸機関への提案活動
履修学年及び単位数	普通科第２・３学年文系クラス　３単位 （第２学年：２単位、第３学年：１単位）

ｂ　ＳＧベーシックセミナー

普通科第１学年を対象に、「現代社会」（第１学年２単位）のうち６時間分を減じ、「スーパーグローバル（ＳＧ）ベーシックセミナー」（国際的な社会課題に関する教養講座）を行う。

特例が必要な理由	「ＳＧベーシックセミナー」は、国際的な社会課題に関する、幅広く、深い教養を備えさせると同時に、２年次から取り組む「課題研究」に向けた専門的知識の付与を目的としている。そのためには高い専門性を持った講師から体験的学習等様々な手法を用いて、学習指導要領の内容を越えた学習を進めることが、より効果が高いと考える。

	この内容を学習することにより、学習指導要領で掲げる「現代社会」の目標を十分に達成できるものと考える。
内容	生徒の希望により、あらかじめ「国際政治・経済」「環境・エネルギー・食農」「地域文化・多文化共生」の三つのゼミに分かれ、下記内容の学習を行う。 （1）各分野の基礎知識、現状における諸課題に関する講義 （2）フィールドワーク、ディスカッション・ディベート、シミュレーションゲームなどの体験的学習

（２）ＳＧベーシックセミナー

＜仮説＞

国際的な社会課題をテーマとした専門性の高い講義、体験的学習、課題研究、ディベート演習及び質の高い英語学習を行うことで、論理的思考力や国際社会に通用するコミュニケーション能力などの汎用的能力と、生まれ育った地域や国際社会に関する、幅広く、深い教養を身に付けさせることができるのではないか。

＜研究内容・方法＞

①目標

ア．講義や体験的学習を通じて、国際的な社会課題についての関心を高め、主体的・積極的に学習する態度を養う。

イ．専門性の高い講師による講義等を行うことにより、生まれ育った地域や国際社会に関する、幅広く、深い知識を身に付けさせる。

ウ．第２学年で取り組む「課題研究」に向けた動機づけを行うとともに、研究テーマ設定のための基礎となる知識の定着を図る。

②対象学年・学科

第１学年・普通科

③内容

１）講義

・外部指導教員の専門分野（研究テーマ）についての基礎知識

・外部指導教員の専門分野（研究テーマ）についての現状における課題認識

・その他

２）体験的学習

・外部指導教員の専門分野（研究テーマ）に関するグループディスカッション

・外部指導教員の専門分野（研究テーマ）に関するフィールドワーク

・その他演習

３）課題レポート（各講座別のテーマについて８００字以内で記述）

※開講講座（９講座）

ゼミ	講座	外部指導教員	内容の概要
国際政治・経済	福祉経済論	島根大学法文学部 宮本恭子　教授	・意見記述、講義 ・グループディスカッション
	地方財政論	島根大学法文学部 関　耕平　准教授	・講義、グループディスカッション ・フィールドワーク（吉田ふるさと村）
環境・エネルギー・食農	食品機能学	島根大学生物資源科学部 室田　佳恵子　教授	・講義、グループディスカッション ・実験、全体発表
	昆虫生態学	島根大学生物資源科学部 泉　洋平　准教授	・講義、校地内でのフィールドワーク ・実験、全体発表
地域文化・多文化共生	考古学	島根大学法文学部 岩本　崇　准教授	・講義、グループディスカッション ・フィールドワーク（横穴式石室墳）
	日本語学	島根大学法文学部 野間純平　講師	・講義、グループディスカッション ・全体発表

	日本近世史	島根県立古代出雲歴史博物館 矢野 健太郎　専門学芸員	・講義、グループディスカッション ・フィールドワーク（古代出雲歴史博物館）
	国際協力の現状	独立行政法人国際協力機構 岩田和美　国際協力推進員	・講義、グループディスカッション ・シミュレーションゲーム
	地域活性化（街づくり）	神門通り甦りの会 田邊達也　代表	・講義、グループディスカッション ・フィールドワーク（出雲大社門前町）

④指導計画

第１回：平成３０年１０月１５日（月）　５・６限（１３：１５～１５：０５）
第２回：平成３０年１１月１２日（月）　５・６限（１３：１５～１５：０５）
第３回：平成３０年１２月１０日（月）　５・６限（１３：１５～１５：０５）

⑤内容の詳細

【福祉経済論】

講義の様子

現代の日本における子どもの貧困問題に対し、高校生としてできることを３回の講座を通して考えた。第１回の講座では、子どもの貧困問題の現状や対策について、課された論題に対して個人の意見を記述した。生徒は、子どもの貧困問題に対する知識不足を感じることになった。第２回の講座では、絶対的貧困と相対的貧困の違いや、絶対的貧困の状況にある子どもはさまざまな機会の平等すら与えられていないこと等を学んだ。第３回の講座では、フードバンクに関する映像を視聴し、子どもの貧困問題に対する具体的な施策や高校生としてできることを改めて考えた。３回の講座で、身近に存在する可能性のある子どもの貧困問題への理解を深め、それを解決しようとする意欲と態度が養われた。

【地方財政論】

「吉田ふるさと村」での説明

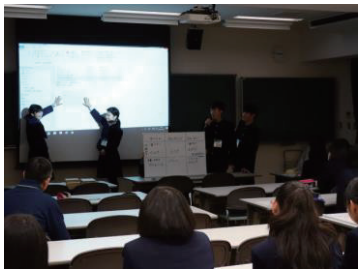
発表に向けての準備の様子

第１回は、「地方創生」の概要について講義を受けた上で、その一つの事例として島根県雲南市に所在する「株式会社吉田ふるさと村」に関する映像資料を視聴した。また、グループごとにＫＪ法を用いて、この企業に関する意見交換を行い、次回フィールドワークに向けて質問内容をまとめた。第２回は、実際に吉田ふるさと村を訪れ、その活動の様子を見学し、現地で働く人の生の声を聞いた。第３回では、あらかじめ各自がまとめたフィールドワークでの学習内容（印象に残ったこと、認識の変化）を発表し、質疑応答を行うことで、内容を共有した。印象に残ったのはマネー経済と実物経済の違いを明確にしたことであった。山下惣一(農民作家)が述べた“安定と成長の関係性”では、経済効率優先の経済政策の是非を考えさせるものがあった。彼の言葉に「経済成長するほど、農業や地方が疲弊してきたのがこれまでの歴史です。自然を相手にする農業は成長してはいけない。去年のように今年があり、今年のように来年があるのが一番いい。私たちはこれを安定といい、経済学者は停滞という」とあるが、この言葉は生徒たちが多角的視点を持つための一つのきっかけとなったようだ。

【食品機能学】

第一回では「ビタミンＣの抗酸化力測定」と題し、飲料の抗酸化力一般について講義を聞いた後に、市販のビタミンＣ飲料の抗酸化力を測定する実験を行った。実験では吸光度計を使用し、測定した吸光度をグラフにまとめた。第二回では「様々な飲料の抗酸化力測定」と題し、生徒が持ち寄った飲料の抗酸化力を測定する実験を行った。実験方法は第一回のものに従って行った。第三回では、第二回に行った実験結果（グラフ）をもとに各班で考察し、実験結果について班ごとに発表を行った。

実験の指導

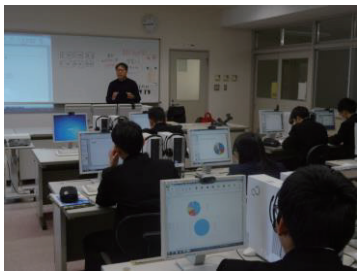


実験結果の発表の様子

【昆虫生態学】

第１回は、「地球温暖化と昆虫」のテーマのもと、地球温暖化による昆虫への影響について講義を受けた。昆虫の分布や構成比率、侵入害虫など多岐にわたるものであった。第２回は、本校の校舎裏にある「平田植物園」で虫の採集をおこない、その後、採集した虫の観察や測定を実施した。第３回では、前半にプレゼンテーションの基本についての講義を受け、後半では第２回に測定したデータを分析した上、その結果をパワーポイント資料にまとめる作業をおこなった。これらを通して生徒は、第２学年になって実施する課題研究のサイクルである「仮説設定→仮説検証→考察→プレゼンテーション」という大きな流れを学ぶことができ、非常に有意義な授業であった。

平田植物園での虫の採集



プレゼンテーション指導の様子

【考古学】

第１回は考古学の研究方法や、出雲地方の古墳の概要などについて講義を受けた。第２回は、大念寺古墳と上塩冶築山古墳の石室の現地調査を行った。石室内の石材の材質や加工の程度について、班別に分担を決めて観察、記録した。第３回は、現地調査で観察した記録をもとに、班で石材について分析した。分析をふまえ、石材が出雲地方のどこで入手されたものか把握するために、地質図と照合して検討した。３回の講義と現地調査を通して、考古学の研究手法を学ぶとともに、出雲地方の古墳や歴史について興味関心を高めることができた。

観察記録の分析の様子

【日本語学】

第１回は身近な言葉の変遷や、地域差に注目して「日本語学（言語学)」が「正しさ」を求める学問ではないということを中心に講義を行った。また、地域によっても同じ意味を有する言語であっても、話し言葉は異なることを、身近な例を用いて生徒に体感させた。第２回では、島根県における「方言」に注目し、大学のフィールドワークの資料をもとに、地域差や年代差などについて個人で考えてきた内容をもとにしてグループでディスカッションを行った。第３回では、使う方言が類似している生徒同士で班を作り、ディスカッションをしながら第１回、第２回の内容をまとめた。

講義の様子

【日本近世史】

第１回は幕末から明治初期にかけての島根の様子について、講義を受けた。特に、幕末期における石見銀山の人々について、古文書の史料を通して学んだ。第２回は島根県立古代出雲歴史博物館を訪れ、史料と展示されている古文書を見比べたり、神在月の関係資料や神像彫刻を観察したりした。第３回は、実際に古文書の読み解きに挑戦し、古文書についての知識をさらに深めた。３回の講義とフィールドワークを通して、地元島根の歴史についてより深く学ぶことができた。

古文書読み解きの様子

【国際協力の現状】

３回のワークショップにおいて、ゲームや体験を通して世界に存在する様々な問題について考える貴重な機会となった。第１回では世界の不平等や格差が垣間見え、格差が広がっていく仕組みを、貿易ゲームを通して身を持って体験した。第２回では、異文化では前提やルールが違うということを、カードゲームを通して体感し、そのような状況ではどのように対応していくべきかをグループ討議をしながら考えた。第３回では、カカオ豆を栽培する農園の人は、買い取り業者を選ぶことができない実態を知り、フェアトレード製品についても体験を通して理解を深めた。

ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟの様子

【地域活性化（街づくり)】

第１回は、出雲大社門前町「神門通り」の街づくりを民間主導で行ってきた講師のこれまでの取組について、「まちおこしとまちづくり」の観点から説明を受けた。その上で、第２回は実際に神門通りを訪れ、店舗従業員や街づくりに携わってきた人たちの取組や工夫をインタビューし、観察・写真撮影による記録をするとともに、神門通りの良さや街づくりの改善点について考えた。第３回では、フィールドワークを通して気づいた内容を撮影した写真をもとにグループごとにポスターにまとめ、将来の神門通りのあり方についての提案を発表した。

ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸに向けて講師から説明

提案に向けて

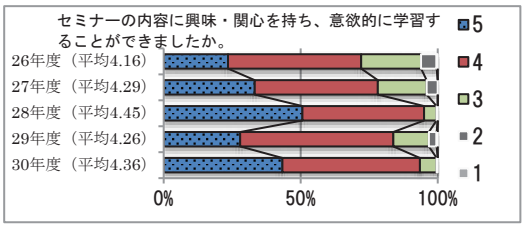
３回の講座のあと、冬休みの宿題として「課題レポート」（８００字以内）を課した。各講座別のテーマは以下の通りとした。

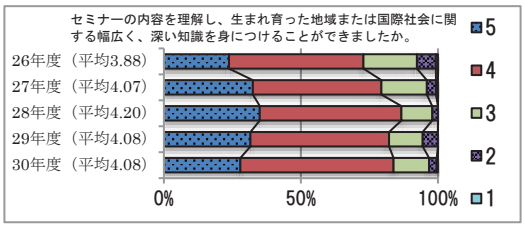
講座	課題レポートテーマ
福祉経済論	以下の質問について、自由に記載する。 1 格差は容認されるとしたら、①どのような格差は容認されて、②どのような格差は容認されないのでしょうか。 2 授業をとおして、「子どもの貧困」に対する思いや考え方が変わった部分があれば、どのように変わったかを書いてください。
地方財政論	3 回の講義を通じて、「最も印象的だった言葉・事実」と「学んだ内容」をまとめ、さらに「今後の学習や将来にそれがどう生かすことができるか」について記述せよ。
食品機能学	今回の実験で抗酸化力を測定した飲料について以下のことについてまとめる。日本語による記述やグラフ、図、イラスト等をどのように用いるかは各自の判断とする。 ＊ 抗酸化力の強さの比較 ＊ 抗酸化力の強さはどのような原材料や成分によるものだと考えられるか また、第 3 回目の授業で取り上げた食品の機能性の表示について、自分の考えや感想を 400 字以内で述べる。
昆虫生態学	授業で作り始めたスライドのイメージ図を完成させる。（空白の使い方は自由。） また、500 字以内でその発表原稿を作りなさい。その際、考察に力点を置くこと。
考古学	身の回りの文化財をとりあげて、出雲市と島根県を自分なりにアピールしてみてください。
日本語学	授業で行ったアンケートの結果を分析し、そこから読み取れる「ことばの多様性」について述べてください。家族や友達に追加で調査を行ってもかまいません。
日本近世史	３回の講義（フィールドワーク、ワークショップを含む）を振り返り、幕末の島根の歴史や古文書解読（歴史学の基礎研究）について、自分にとって新たな発見となったこと、最も印象に残ったことをまとめてください。
国際協力の現状	３回の授業の中で最も印象に残ったものを挙げ、 ①それについて自由に論じてください。 ②①で取り上げた問題について、「自分自身が今できること」を自由に述べてください。 （ただし「募金する」「物資を送る」以外のことを考えてください。）
地域活性化（街づくり）	第１回の講義で「町おこしは宝さがし」＝「自分の中の宝探し」と言いました。自分の中にある宝（才能、特技、好きなこと）について自由に書いてみましょう。

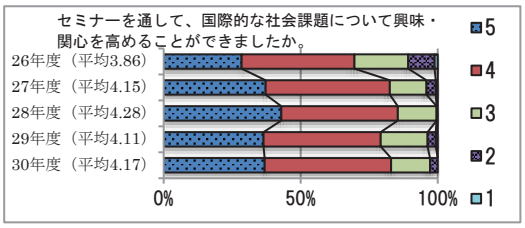
＜検証＞

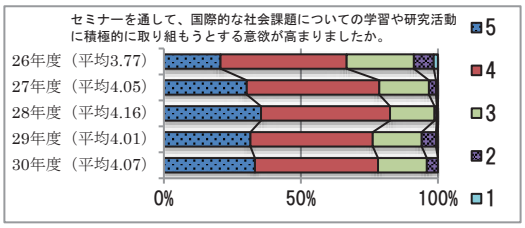
①アンケート結果より

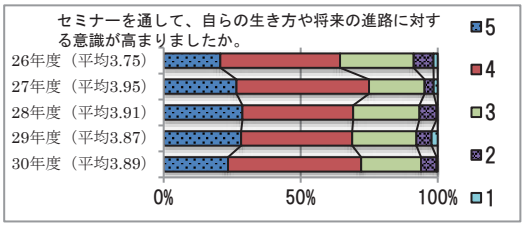
実施後のアンケート結果は以下のとおりである。回答基準は（５：とてもそう思う、４：そう思う、３：どちらでもない、２：あまり思わない、１：全く思わない）の５段階とした。











○自由記述欄からの抜粋

【福祉経済論】

・日本に貧困という言葉は関係ないと思っていたが、ベーシックセミナーを通して、「相対的貧困」「フードバンク」「子供の貧困」といった言葉を知り、ビデオでリアルな現状を見て、衝撃を受けた。セミナーがきっかけで、興味が湧いたので、自分でもっと調べたい。今までは「世界の貧困をなくすために出来ること」を考えていたが、今は「世界の貧困をなくす為に、まず日本の貧困をなくさなければいけない」と考えている。

【地方財政論】

・今ある問題を、どうしてその問題が起こったのか、どうしたら解決できるのかという考え方を学ぶことができた。これから何か自分に問題か起きたとき、役に立つと思う。また他の問題も、人ごとだと思わず、社会の一員として、どうしたらいいのかも考えたい。

【食品機能学】

・理系の内容のセミナーだと考えていたが、現象や事象がいろいろなものに応用されていることや、国内の法律や、国際的にはどのように法律になっているのかなど、文系と理系の両方を一度に学べて良かった。

【昆虫生態学】

・ベーシックセミナーは、自分が学びたいことを学べる点が良かった。自分が得意とすることや好きなこと、また、そうではないものを学ぶことで、専門的な知識・理解を深める、あるいは自分の視野を広げることができると思うので、有意義な時間だった。３回のセミナーを、説明⇒実験⇒考察・まとめに分けてあったので、とても分かりやすかった。

【考古学】

・もともと古墳に少し興味があったが、今回のセミナーで、実際に玄室に入ったり、古墳同士の類似点等を見つけたりする活動があり、とても面白い経験だった。また、自分は古墳自体よりも、それを作った人々の考え方の方に興味があると気づいた。今後の進路

の参考になる。
【日本語学】
・各地方によって違う方言を調査し、データ化して考察するという過程がとても興味が湧いた。今後の生活や課題研究などで活用したい。
【日本近世史】
・古文書が残っていることはすてきなことだ。時間を超えて何百年後までも伝えることができるのは、書いた人もびっくりだと思うし、自分たちにとっても貴重なことだ。自分の育った町で、何があったのか学ぶのはとても面白いし、重要なことだ。
【国際協力の現状】
・セミナーの中で行ったグループ活動で、国際社会の課題・問題がどのようなものかを実際に体験することができたので、国際社会の一員としてこれから先、生きていく心構えができ、「世界の平和・幸福のために尽くせる人になりたい」と強く思った。自分の今後の進路に関する視野を広げることができたので、良かった。
【地域活性化（街づくり）】
・実際に町を歩き、改善点を見つけ、班員と話すことで考えが深まり、自分にない考えを見つけることができた。講師の先生の「神門通りをよくしたい」という強い気持ちを聞き、町おこしについての関心が深まった。

本年度も、アンケート結果からほとんどの質問項目について高い評価をする生徒が多かった。「セミナーの内容に興味・関心を持ち、意欲的に学習することができたか」との質問について「５：とてもそう思う」「４：そう思う」を答えた生徒の割合は、９４％（５段階の平均値４．３６）であり、ほとんどの生徒が意欲的に学習に取り組むことができた。特に「国際協力の現状講座」（平均値４．６３）、「地域活性化（街づくり）講座」（平均値４．５７）、では高い評価をする生徒が多く、全９講座中８講座で平均値が４を超えた。

また、「国際的な社会課題について興味・関心を高めることができたか」あるいは「国際的な社会課題についていの学習や研究活動に積極的に取り組もうとする意欲が高まったか」との質問についても高く評価する生徒が多く、「５：とてもそう思う」「４：そう思う」を答えた生徒の割合は、それぞれ８３％、７８％であり、このセミナーの目標とする、「国際的な社会課題についての関心」の高揚、あるいは「主体的・積極的に学習する態度」の醸成に大きく寄与しているものと考えられる。

指定１年目にはセミナーで取扱う内容がやや難しいとの指摘を受け、２年目にフィールドワークの機会を増やすなどの改善を行ってきたが、それ以降安定して、全体的に高い評価を受けてきた。昨年度、本年度と、一部の講座で急遽休講とせざるを得ない回があったが、このような講座では多くの項目で評価が下がる傾向にあった。これは意欲的に受講をしたいと思っていた生徒がその機会を奪われたことに対する反応であると解釈できる。

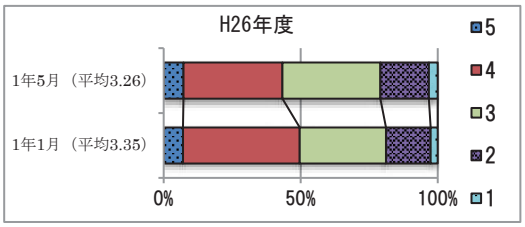
このような結果から、また生徒の自由記述からも、本セミナーが国際的な社会課題についての関心を高め、主体的・積極的に学習する態度を養ううえで、また「課題研究」に向けた動機づけを行うとともに、研究テーマ設定のための基礎となる知識を身につけるうえで、必須のものとなってきたことが分かる。

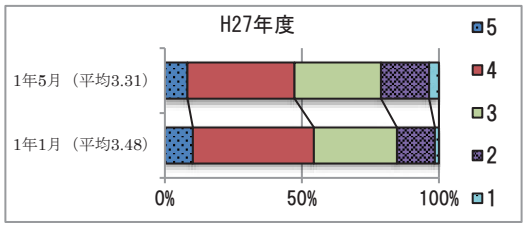
②生徒意識調査より

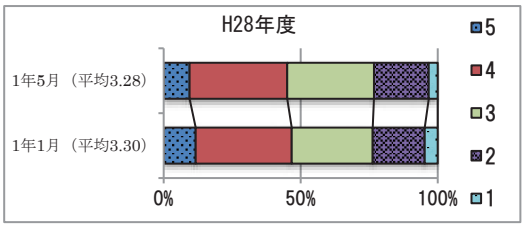
生徒意識調査（「Ⅳ　研究開発の評価」参照）のうち、仮説検証につながる質問項目についての結果は以下のとおりである（対象：１年普通科）。意識調査の回答基準は（５：とて

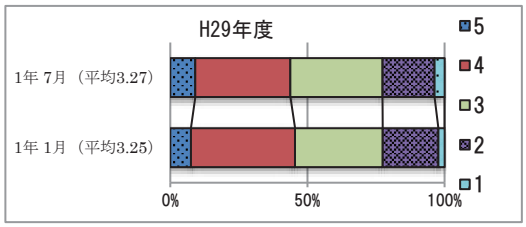
もそう思う、４：そう思う、３：どちらでもない、２：あまり思わない、１：全く思わない）の５段階である。

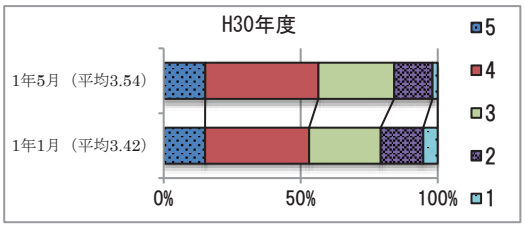
問１　あなたは身近な地域の事柄や課題に興味・関心がありますか。



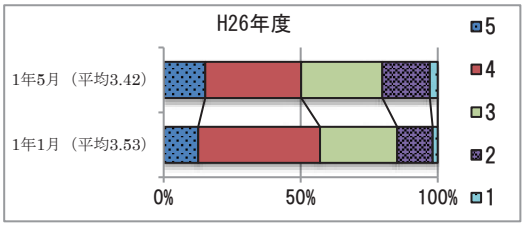


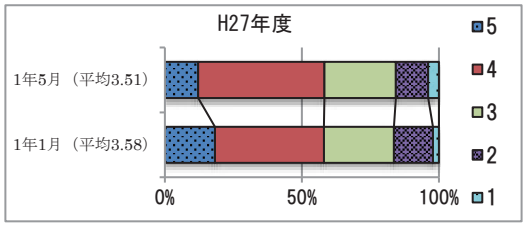


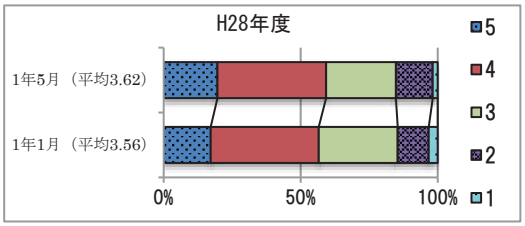


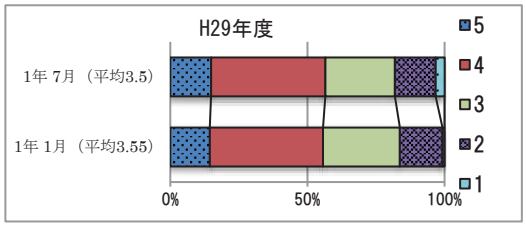


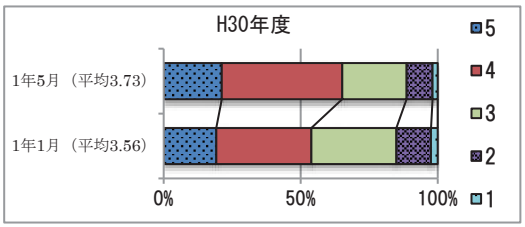
問２　あなたは国際的な社会課題に興味・関心がありますか。











この調査結果によると、「身近な地域の事柄や課題に興味・関心があるか」との質問に、「５：とてもそう思う」「４：そう思う」と答えた生徒の割合は、過去４年間は毎年度、年

度当初よりも高まる結果となった。また、「国際的な社会課題に興味・関心があるか」との質問では、「５：とてもそう思う」「４：そう思う」と答えた生徒の割合は、指定３年目以降は年度当初よりも若干低くなる傾向にあり、本年度は明らかに低くなった。一方で、上記２つの項目のいずれにおいても本年度は年度当初から「５：とてもそう思う」「４：そう思う」と回答した生徒が特に多く、１月にはその高い水準を維持できなかったと言えよう。本校でのＳＧＨの取組が中学生にも評価され、身近な地域の事柄や課題、あるいは国際的な社会課題に高い興味・関心がある生徒にとっても、その興味や関心がさらに高まるような取組を考えていく必要がある。

＜今後に向けて＞

過去５年間の結果から、ＳＧベーシックセミナーをはじめとした一連の取組により、仮説のうち、「論理的思考力や国際社会に通用するコミュニケーション能力」等を育成するための素地を育み、また「生まれ育った地域や国際社会に関する、幅広く、深い教養を身に付けさせる」ことができることを十分に実証できた。その中で、このセミナーは１年次からこのような素養を身に付けさせるために大きな役割を果たすようになっており、本研究開発において確立されたものとなっている。

本セミナーは教育課程の特例により実施しているものであり、ＳＧＨ指定後にはこれまで実施してきたそのままの形を継続することはできないが、その要素の一部やここで検証・確立してきた手法等は今後も何らかの形で残していく必要がある。

（３）学校設定科目「ＳＧ探究」における課題研究

＜仮説＞

国際的な社会課題をテーマとした専門性の高い講義、体験的学習、課題研究、ディベート演習及び質の高い英語学習を行うことで、論理的思考力や国際社会に通用するコミュニケーション能力などの汎用的能力と、生まれ育った地域や国際社会に関する、幅広く、深い教養を身に付けさせることができるのではないか。

課題研究やディベート演習において、協働的な学習を行うことで、答えの見えない課題に対して粘り強く追究する姿勢や新たな価値あるものを生み出す創造性を育むことができるのではないか。

＜研究内容・方法＞

①目標

ア．生まれ育った地域や国際社会の現状についての関心を高め、主体的・積極的に学習する態度を養う。

イ．客観的な文献や資料等をもとにしながら、それぞれの分野についての基礎的・基本的な知識の深化を図る。

ウ．他の人と関わり合いながら協働して学習することを通して、自らあるいはグループの意見を論理的にまとめる力を養う。

エ．グループでまとめた内容を、他の人に分かりやすく正確に表現する力を養う。

②対象学年・学科

第２学年・普通科

③内容

１）研究テーマに関するゼミ別講義

・外部連携指導員の専門の研究分野の内容及び最近の研究課題

・課題研究の進め方

・グループごとの研究テーマ案に対する外部指導教員からのアドバイス

２）グループ別研究活動

・グループごとの研究テーマの検討

・研究計画書の策定

・文献・論文・資料等の読解・分析、各種調査活動（インタビュー調査、フィールド調査、アンケート調査など）

３）研究レポート・発表用資料作成、研究成果発表

・ゼミ別研究成果発表会（スライド発表）、校内研究成果発表会（ポスター発表）

４）振り返り

・課題研究についての自己評価

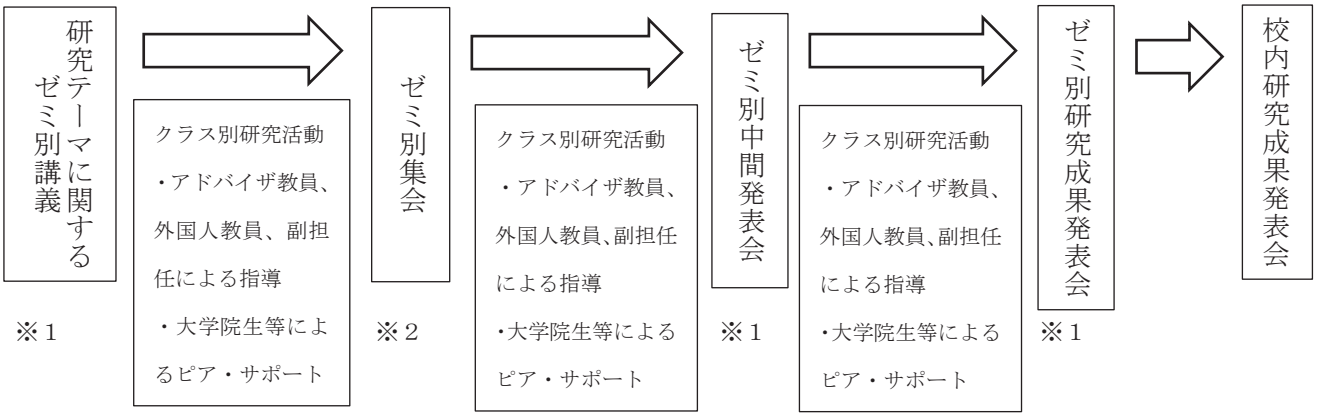
・進路意識の醸成

・第３学年次の活動に向けてのオリエンテーション

※開講ゼミ

ゼミ	グループ数	外部指導教員	外部指導教員の研究分野
国際政治・経済	3	島根大学法文学部 渡邉　英俊　准教授	国際経済論、地域経済論、国際政治経済学
	2	島根大学法文学部 関　耕平　准教授	財政学、地方財政論
	1	出雲市役所総合政策部政策企画課 荒木真一　係長	出雲市の街づくり
	2	島根県立大学（浜田）総合政策学部 木村秀史　准教授	地域経済論、地域政策論
環境・エネルギー・食農	1	島根大学生物資源科学部 門脇正行　准教授	作物の光合成と物質生産
	2	島根大学生物資源科学部 江角智也　准教授	果樹園芸学
	3	島根大学法文学部 上園昌武　教授	環境・エネルギー政策
地域文化・多文化共生	1	島根大学法文学部 板垣貴志　准教授	日本近現代史
	3	島根大学法文学部 田中一馬　准教授	哲学、倫理学
	1	島根県立古代出雲歴史博物館 岡宏三　専門学芸員	近世社会文化史
	3	島根県立大学（松江）人間文化学部 中野洋平　講師	民俗学
	2	独立行政法人国際協力機構 岩田和美　国際協力推進員	開発教育、国際理解教育
	3	島根県立大学（松江）人間文化学部 増原義之　准教授	多文化共生

※課題研究の進め方の概念図



※1　外部連携指導員による指導・助言
※2　校内アドバイザ教員による指導・助言

④指導計画

主題	内容	時間
オリエンテーション	活動計画の説明、研究分野希望調査	2
グループ別研究活動	研究領域の設定、研究テーマ（候補）検討、サブテーマ検討	3
	研究テーマ（候補）の予備調査	4
研究テーマに関するゼミ別講義	「課題研究の進め方」、「研究テーマ検討」 講師：外部指導教員 13 名	2
グループ別研究活動	研究テーマについての再検討	2
	研究テーマ（仮）検討	3
	アドバイザ教員との協議による研究テーマ検討（ゼミ別集会）	1
	研究計画策定	2
	研究テーマ（本）検討、文献・論文・資料等の読解・分析、各種調査活動（インタビュー調査、フィールド調査、アンケート調査など）	3
	中間報告書・発表用資料作成、プレゼン練習	3
	ゼミ別中間発表会	2
	ゼミ別中間発表会の振り返り、各種調査活動	10
研究レポート・発表用資料作成、研究成果発表	研究レポート・発表用資料作成、プレゼン練習	14
	ゼミ別研究成果発表会	2
	校内研究成果発表会	6
振り返り	課題研究についての自己評価、進路意識の醸成、第３学年次の活動に向けてのオリエンテーション	6

⑤内容の詳細

１）研究テーマに関するゼミ別講義

増原善之准教授による講義

今年度は生徒たちがより幅広く研究が行えるように島根大学の教員はもとより、島根県立大学の教員、外部機関の協力も仰ぎながら、ゼミを３ゼミ１３講座とした。また今年度は、３つ程度設定した研究テーマ（候補）に関して、文献・論文・資料等の読解・分析を中心とする予備調査の時間を捻出し、複数の研究テーマ候補の内容を比較・検討することで、自分たちなりに深めさせた。その上で、ゼミ別講義を行い、外部連携指導員から最新の研究成果の説明や課題研究に取り組むための心構えについて講義をしていただき、グループで共有した。また、事前に考えた研究テーマ（候補）に関して、そのテーマを設定した経緯、明らかになったこと、現段階の研究動向などをグループごとに外部連携指導員にプレゼンを行った。それに基づいて、アドバイスをいただきながら、研究テーマの内容を深化させるとともに、テーマの絞り込みを行った。

研究テーマ案のプレゼン

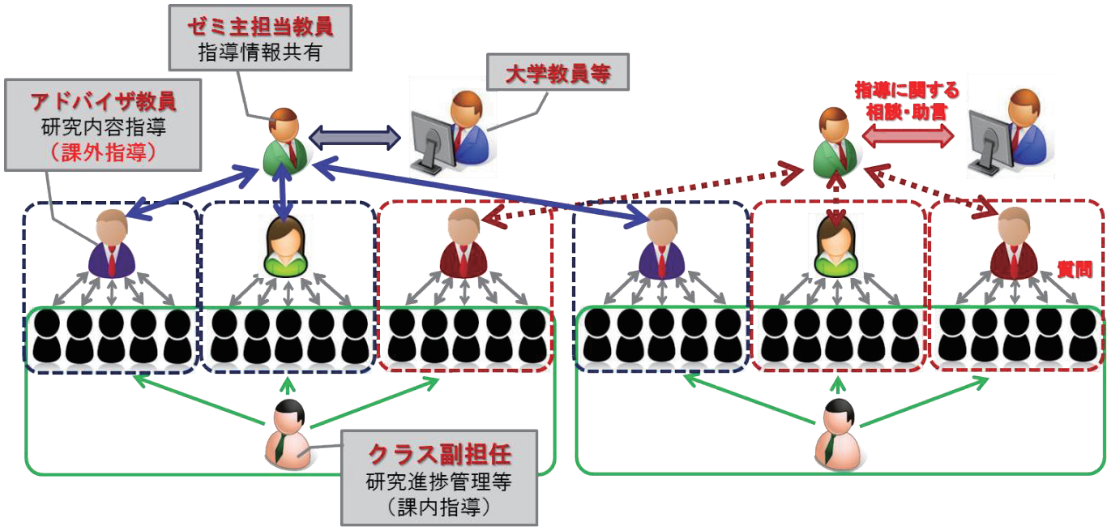
門脇正行准教授からのアドバイス

２）グループ別研究活動

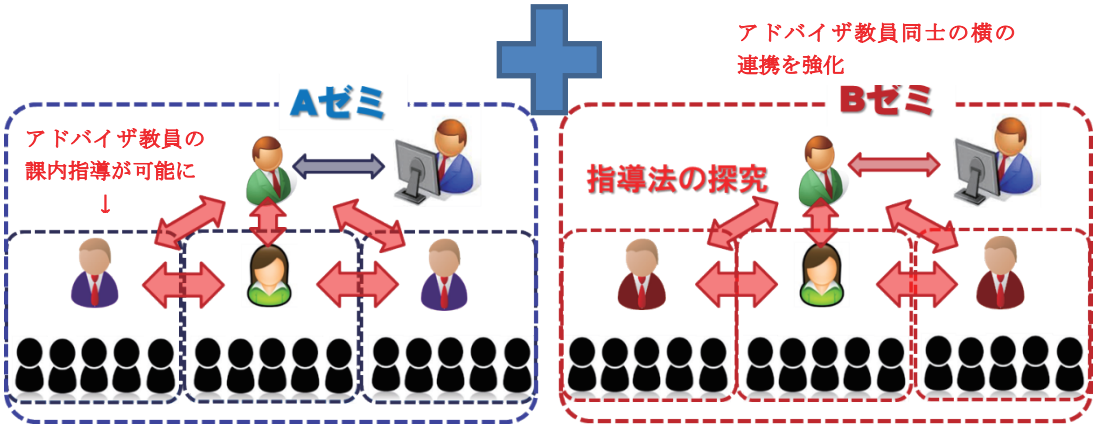
研究活動を進めるにあたっては、本校の課題研究の指導モデル（「出雲モデル」）である「複数の教員が関わる多角的・多面的指導体制」を今年度も継続し、本校のほぼ全ての教員及び外部指導教員が以下の役割を分担し、生徒の指導にあたることとした。

ただし、これまではアドバイザ教員が課内での指導ができなかったこと、またアドバイザ教員同士の連携がとれなかったという反省点を踏まえて、以下の図が示すとおり、アドバイザ教員の課内での指導も可能にする、アドバイザ教員同士の会議を設定する等の改善を行った。このことについては、後述する。

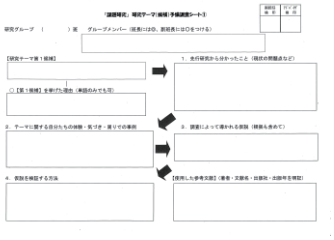
指導教員等	役割
クラス副担任	クラスの課題研究の進捗管理、研究活動の全般的な相談窓口
ゼミ主担当教員	ゼミ別講義、ゼミ別集会、ゼミ別中間発表会、ゼミ別研究成果発表会の準備・運営、外部連携指導員との連絡・調整
アドバイザ教員	担当するグループの研究活動に対する、研究活動時間および放課後等課外を利用した指導 特別な調査活動を行うグループについて外部機関との折衝指導、特別な調査活動を行う際の立ち会い・指導
外国人教員	研究活動・内容に関する指導、研究レポートの英語表記に関する指導
外部連携指導員	研究活動・内容に関するメール等（または直接）による指導、ゼミ別講義・ゼミ別発表会での指導・助言
大学院生等	担当するグループの研究活動・内容に関するピア・サポート



図：出雲高校の課題研究指導体制（出雲モデル）



前述したとおり、今年度は生徒が複数の研究テーマ候補を比較・検討するための予備調査の時間を捻出した。その際、「研究テーマ（候補）予備調査シート」を活用し、課題設定から仮説検証までのフローチャートを示したことで研究テーマに関する知識がより一層深まった班も見られた。その後、アドバイザ教員や外国人教員（昨年度と同様、カナダ出身と中国出身の２名）の指導を受けながら、各グループが予備調査をさらに進めて研究テーマを決定した。また、このシートには「自分たちの体験・気づき・周りでの気づき」という項目も作成し、実社会や実生活の課題解決につながる研究をより一層進められるように工夫を加えた。その後、全アドバイザ教員が参加してのゼミ別集会において、同じゼミの他のグループやアドバイザ教員から意見をもらい、研究テーマの絞り込みを行った。

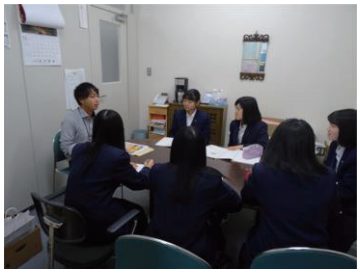

研究テーマ（候補）予備調査シート

研究計画書の策定にあたっては、昨年度同様、できるだけインタビュー調査、フィールド調査、アンケート調査など独自の調査活動を計画するよう指導した。中には、生徒たちが普段着用しなくなった衣服を廃棄することに疑問を感じ、リユース・リサイクルの方向を模索するため出雲市役所の担当課にインタビュー調査を行うグループや、自分たちが住む身近な商店街を活性化させようと個人商店にインタビュー調査やアンケート調査を行うグループもあり、昨年度以上に地域の問題を「自分ごと」として捉えようとするグループが見られた。また、一昨年度から取り組んだ「多文化共生社会」の研究内容を継承し、発展させようと外国人の日常生活について地元企業の協力を得てアンケート調査やインタビュー調査を行い、外国人の方がより過ごしやすい地域作りを模索したグループや、家庭内の食品ロスの現状を把握するため本校保護者にアンケート調査を行うグループもあった。

複数の教員等による多面的指導

アドバイザ教員による課内指導

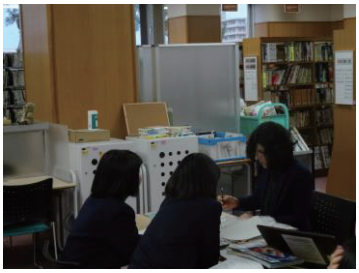
地元個人商店でのインタビュー調査


地元協同組合でのインタビュー調査

ゼミ別中間発表会では、外部指導教員からその後の研究活動について具体的なアドバイスをもらい、その指導に従って当初の計画を大幅に練り直すグループも見られた。

３）研究レポート・発表用資料作成、研究成果発表

研究成果は、例年通り、論文形式の研究レポート（Ａ４用紙１０枚程度）にまとめ、研究テーマを日本語表記と英語表記を並列に書かせ、レポート冒頭には Abstract を英文で表記させることとした。昨年度同様、Abstract の英文表記の指導者として、島根県及び出雲市の国際交流員４名と島根県教育委員会の外国語指導助手（ＡＬＴ）１名を招致し、生徒の指導にあたってもらった。また、本年度から本校に配属されているＡＬＴの他校訪問日数が減り、本校での勤務時間が長くなったことから、本校ＡＬＴも指導に加わることが可能となった。


国際交流員による Abstract の指導

そして、昨年度同様、ゼミ別成果発表会前に、外国人教員に指導にあたってもらい、発表練習を行った。ゼミ別研究成果発表会では、各グループ８分間の発表を行わせ、研究レポートの内容、プレゼンの内容及び発表用資料の内容について、ゼミ主担当教員を含めた複数の教員が以下の評価の観点、評価規準に基づき、ルーブリックを用いた評価を行った。

プレゼンテーション練習

ゼミ別研究成果発表会

評価の観点	評価規準
①学習に向かう意欲・態度	学習内容に関わる事柄に関心を持ち、受け身ではなく主体的、創造的、協働的に学習に向かうことができる。
②論理的思考力	客観的根拠や学術的理論に基づいて、論理的に思考し、自らの考えを組み立てることができる。
③コミュニケーション能力	他者の意見を聴き、それを尊重しながら自らの考えを述べるなど、他者と協働しながら学習を進めることができる。
④問題解決能力	客観的事実に基づいて現状の課題を発見・分析し、その解決に向けた自らの考えを構築することができる。
⑤情報活用能力	情報についての基本的な知識・モラルのもとに、その収集方法を身に付け、集めた情報を整理・分析し、活用することができる。
⑥プレゼンテーション能力	学習や研究の成果を文章やスライドに分かりやすくまとめ、その内容を的確に説明することができる。

校内研究成果発表会は出雲市民会館を会場に、平成３１年２月６日（水）に開催した。ＳＳＨ研究成果発表会と合同で行ったが、ＳＧＨ対象生徒のうちゼミ別研究成果発表会で評価の高

校内研究成果発表会

全グループによるポスター発表

かった２グループがステージ発表を行い、全てのグループがゼミ別の会場に分かれてポスター発表を行った。今年度は天候にも恵まれ、県外・県内教育関係者、地域の方々や本校保護者などの多くの方が参観され、研究成果を地域へ発信する有意義な発表会となった。

※優秀作品

代表２作品	・木次線の需要を高めるには？（国際政治・経済ゼミ） To continue the Kisuki line? ・神話×出雲駅伝！（地域文化・多文化共生ゼミ） MYTHOLOGY×IZUMO-EKIDEN！
優秀・優良作品	【国際政治・経済ゼミ】 ・民泊を使って出雲市の観光客を増やすには？ How can we use Minpaku to increase tourists in Izumo？ ・出雲市に「ベビーブーム」を起こすには？ How can I get a "baby boom" in Izumo? 【環境・エネルギー・食農ゼミ】 ・保水性のある物質を混ぜて、乾燥ストレスに対応することはできるのか？ We may deal with drying-stress by mixing sandy soil with different materials which have water-retaining capabilities? ・学生うけする西浜いも商品は何か？ What Nishihama sweet potato products are popular with students? 【地域文化・多文化共生ゼミ】 ・出雲で働く外国人に快適に過ごしてもらおう Let’s make comfortable life for foreigners living in Izumo ・素晴らしきラジオ体操 wonderful radio exercise ・家庭内の食品ロスの発生を抑制するためには？ What can we do to suppress the occurrence of food loss? ・日本の昔話において、なぜいじわるをするのは隣人か？ ～西洋と日本の『悪役』たち～ Why is neighbor portrayed as villain in Japanese old tales? ～The villains between Japan and Western countries～

一連の流れの中で、本年度これまでとは指導の体制を大きく変えた部分について、以下にまとめる。

研究をはじめるにあたって本年度はまず各グループで３つの研究テーマ候補を策定し、比較・検討を行ったことは前述のとおりだが、各グループで候補の絞りこみを行ったところでゼミ別集会を開催し、ゼミ毎に生徒とアドバイザ教員が一同に集まって各グループの研究テーマについて協議をした。これにより、生徒と教員で研究の内容について共通理解をはかって研究を始めることができた。その後、ゼミ別教員研修会を開催し、課題研究の指導方法について協議を行った。この流れにより、異動してきたばかりの教員であっても、本校での課題研究指導に対する理解を深めることができた。

また、これまで本校のアドバイザ教員は授業内で生徒を指導することはなかった。各クラスには８～９つ程度の研究グループがあるが、これだけの数のアドバイザ教員が全ての

クラスで授業に参加することは、物理的に不可能だからだ。しかし、放課後に他の用務がある場合等に十分な課外指導ができなかったり、生徒が誤った方向に進んでいた場合にそのことに気がつくのが遅れ、貴重な研究時間を無駄にしてしまう、といった側面もあった。このため、本年度は各クラスに８名程度のアドバイザ教員団を配置し、２時間連続で行う授業のうち、少なくとも１コマは授業入れずに空けておくこととした。これにより、生徒の進捗状況に心配がある場合や放課後等での指導が困難な場合には、授業に行って課内で指導をすることが可能となった。授業内での生徒の様子を観察することにより、これまで以上に的確なアドバイスをすることが可能となった。また、生徒たちが正しい方法に進んでいると思える場合には短時間でアドバイスを切り上げ、課外の指導も短縮することができる、というメリットもあった。

さらに、人事異動等により本校での課題研究の流れが分からない教員が増えるにつれ、これまで当たり前に行っていたことに支障がでるようになってきた。そのため、本年度は「『課題研究』教員用指導マニュアル」を作成し、教員に年間の指導の流れについてのイメージを持たせるとともに、指導の過程で必要となる手順等についても網羅した。

平成３０年度　２年生普通科課題研究　指導の流れ

教員用指導マニュアルより抜粋（1年間の指導の流れ）

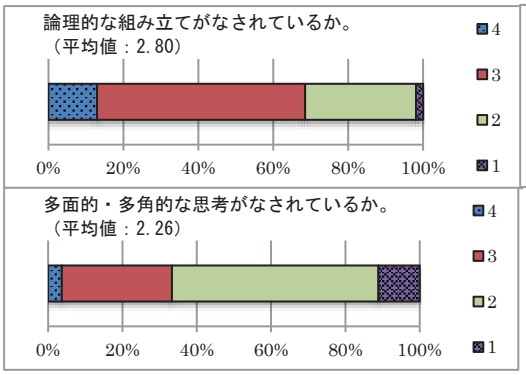
以上のような改善により、本校で確立した「出雲スタイル」を、人事異動等によって教員がかわっても維持していくことができるような、より持続可能なものとする下地ができたものと考えている。

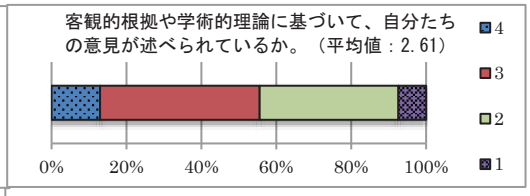
＜検証＞

①教員による研究レポート及び発表評価

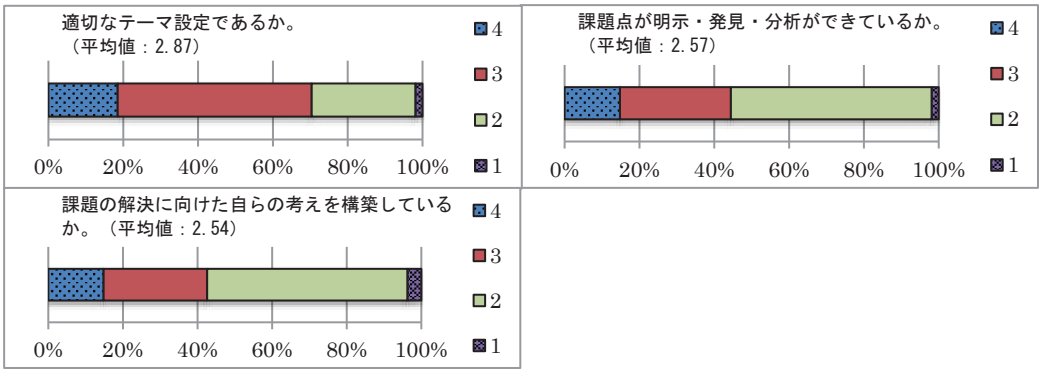
各ゼミ担当教員による研究レポート及び発表の評価結果は以下のとおりである。評価基準は（４：十分できている、３：できている、２：やや不十分である、１：不十分である）の４段階である。

ａ．研究レポートにおける論理的思考力

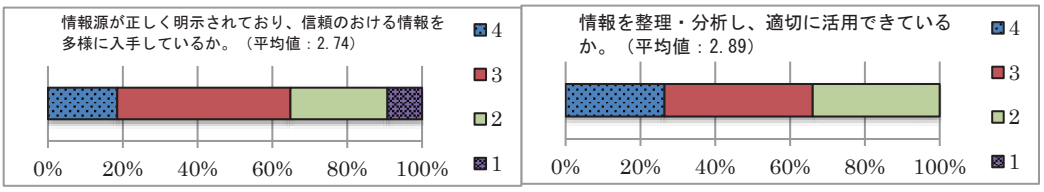




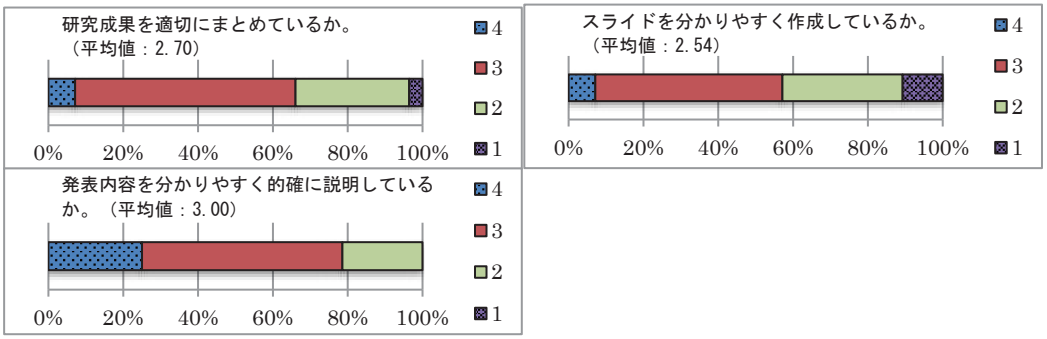
b．研究レポートにおける問題解決能力



c．研究レポートにおける情報活用能力



d．発表におけるプレゼンテーション能力



まず、昨年度より課題研究の評価をおこなう評価の観点、評価基準に基づいたルーブリックに改善を加えて、今年度はそれに基づいてゼミ担当教員は評価をおこなった。具体的には、実験やフィールド調査などの特別調査活動をおこなうグループが年々増加したため、「多角的・多面的思考がなされているか」の項目を加え、また、社会課題を自分のこととして共感できているかを評価するために、「研究テーマ設定」等の評価項目を加えた。これら以外にも文言等に修正を加え、複数の教員が同じ目線にたって評価をすることができるように改訂を行った。

上記の結果から、多くの評価項目で「４：十分できている」「３：できている」と評価されたグループは全体の６０％以上にあたり、多くの班で各能力が育成されたことが分かる。その要因は、主に以下の三点であると考えている。まず、今年度も引き続き職員会議や職員朝礼の時間等を利用して、本校全教員の共通理解に努めた。また、前述のとおり、今年度は「『課題研究』教員用指導マニュアル」を作成し、課題研究の指導に関して教員間で共通理解をより一層はかれるような工夫を行った。さらに、全てのアドバイザ教員がゼミ毎

に集まってのゼミ別教員研修会を開催し、課題研究の指導方法について協議を行ったことも、本校教員の課題研究指導に対する理解が深めるものとして効果的であったと考えている。

「論理的な組み立てがなされているか」「情報源が正しく明示されており、信頼のおける情報を多様に入手しているか」（改変）「情報を整理・分析し、適切に活用できているか」（改変）の項目では「４：十分できている」「３：できている」と肯定的に評価されたグループの割合はそれぞれ６８％（前年度生は６６％）、６５％、６５％であった。「論理的な組み立てがなされているか」の項目は微増ではあるが、論理的に組み立てる能力が着実に育成されたと考えている。また、「情報源が正しく明示されており、信頼のおける情報を多様に入手しているか」、「情報を整理・分析し、適切に活用できているか」についても、高評価を得ており、第１学年次の活動、第２学年次での「ディベート演習」と体系的な学習活動が確実に定着していると同時に、情報科の教員と密に連携をとりながら実施した結果であると考える。また、前述したマニュアル作成や会議の設定、アドバイザ教員の関わり方の見直しなどを通じて、より生徒に細かな指導が加えられるようにしたことで、生徒がより信頼性の高い情報を活用し、論理的に考えを組み立てることができるようになったのではないかと考えている。

また、「適切なテーマ設定であるか」（新規）についても、「４：十分できている」「３：できている」と肯定的に評価されたグループについては７０％であり、高評価であった。教員評価の中にも「自分たちの興味・関心を前提に、自分たちの身近な地域の課題を研究テーマに設定している」などのコメントがあり、身近な地域の現状を捉え、問題を焦点化できていることが窺える。その要因は、第１学年次の「ＳＧベーシックセミナー」で地域の現状や課題について直に触れる機会が多いことが挙げられる。また、前述したとおり、「研究テーマ（候補）予備調査シート」を活用したことも要因であると考えている。研究テーマに関して時間をかけて予備調査をおこなったことで、内容を深めることができ、テーマ設定にも反映したのではないか。

さらに、「研究成果を適切にまとめているか」「スライドを分かりやすく作成しているか」の評価項目で「４：十分できている」「３：できている」と評価されたグループの割合は、それぞれ８３％（前年度生は６８％）、７６％（前年度生は６８％）と、前年度生よりさらに上昇しており、「情報活用能力」が着実に育成されていることが分かる。前述したとおり、第１学年次の活動、第２学年次での「ディベート演習」と体系的な学習活動が確実に定着していると同時に、情報科の教員と密に連携をとりながら研究に向けての取組を実施した結果であると考える。

また、「プレゼンテーション能力」についても、「発表内容を分かりやすく的確に説明しているか」の項目の「４：十分できている」「３：できている」と評価されたグループの割合が今年度は７７％（前年度生は７０％）とさらに上昇しており、この力が着実に育成されていることが分かる。その要因は、昨年度同様、ゼミ別中間発表会、ゼミ別成果発表会前にプレゼンテーション練習をしたことはもちろん、ゼミ別集会を開催するなど、発表の機会が増えたことが挙げられる。また、校内の教員や外国人・大学院生等サポーター等の外部指導者の方々の多面的な指摘、指導はここにも生きている。

一方、「論理的思考力」に関して、「客観的根拠や学術的理論に基づいて、自分たちの意見が述べられているか」（改変）の評価項目では「４：十分できている」「３：できている」と評価されたグループの割合は、５６％であったが、教員評価の中には「自分たちの主張した根拠の理由が明確に示されていない」などのコメントもあり、客観的根拠や学術理論

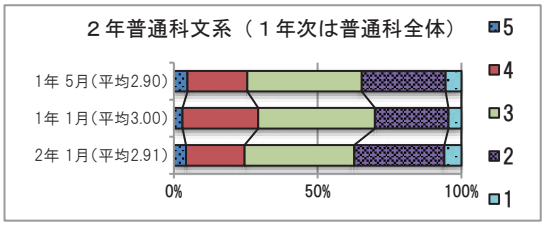
に基づいた論の展開が不十分な面が見られた。また、「多面的・多角的な思考がなされているか」の評価項目では、「４：十分できている」「３：できている」と評価されたグループの割合が３３％であり、他項目と比較して数値が大幅に低い。教員評価の中にも、「画一的に捉えている」「多方面にわたる分析がほしい」などのコメントがあった。この要因は、文献調査において一面的な捉え方をしているグループが多く見られたからではないかと考えている。先に述べたように、インタビュー調査やアンケート調査などの特別な調査活動は２７グループ中２０グループ（前年度生は２８グループ中１２グループ）であり、ますます多くの生徒が主体的に課題研究に取り組んでいる。しかし、これらの活動が文献等と有機的につながっていない。論の展開をなす根拠や資料分析にはまだまだ課題が残る結果となった。

「問題解決能力」に関しては、「課題点が明示・発見・分析できているか」（新規）「課題の解決に向けた自らの考えを構築しているか」という評価項目では、「４：十分できている」「３：できている」と評価されたグループの割合がそれぞれ４４％、４３％（前年度生は６６％）であり、数値が他項目と比較して低く、後者では大幅に数値が下がっている。その要因は、研究を進めるだけで精一杯で、課題点を明示して独自の提案ができるまでに達しなかったグループが多く見られたからではないかと考えている。これまでも課題研究にかける時間が足りないことが指摘されていたが、本年度はさらに「課題研究テーマ（候補）シート」の導入や活用、ゼミ別集会等の新たな試みも行ったので、研究時間がさらに足りなかったことが大きな原因であると考えている。そのため、次年度は課題研究の開始時期を早めることにより、研究結果を分析し、課題点を明示して独自の提案をするだけの時間を確保したい。一方で、このように時間が足りない中でも高齢者向けの新しいラジオ体操を考案したり、出雲大学駅伝の新コースを提案したグループもあり、高校生らしい独創性を発揮したグループが見られたことは評価できる。

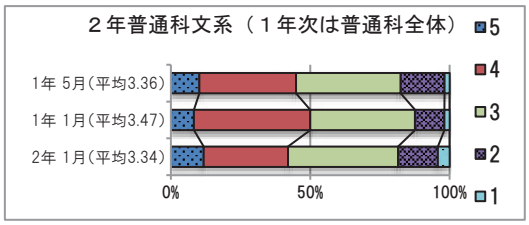
②生徒意識調査より

生徒意識調査（「Ⅳ　研究開発の評価」参照）のうち、仮説検証につながる質問項目についての結果は以下のとおりである。意識調査の回答基準は（５：とてもそう思う、４：そう思う、３：どちらでもない、２：あまり思わない、１：全く思わない）の５段階である。

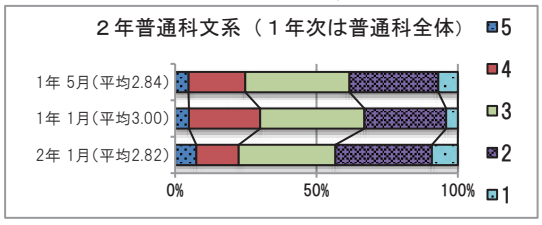
Q．あなたは、物事を論理的に考える力があると思いますか。



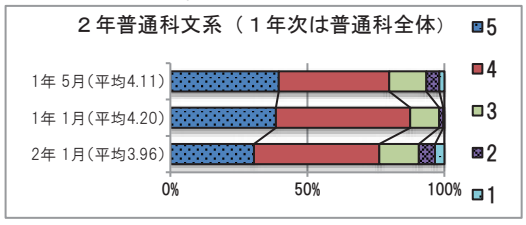
Q．あなたは、様々な情報を集め、整理する力があると思いますか。



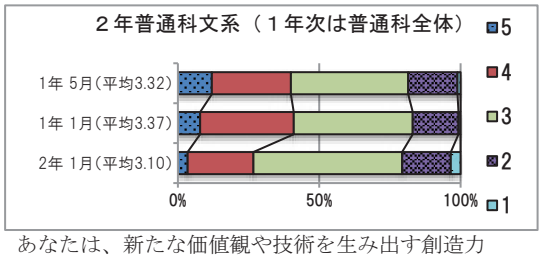
Q．あなたは、伝えたいことを論理的に伝えたり発表したりする力があると思いますか。



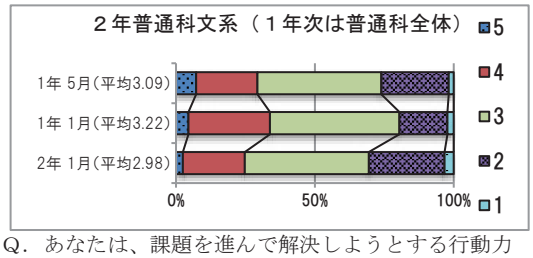
Q．あなたは、他の人と協働して学習することが大切だと思いますか。



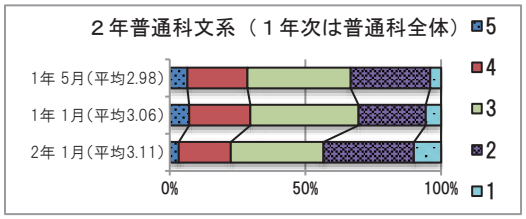
Q．あなたは、自ら（世の中や身近な生活の中の）課題を見つける力があると思いますか。【一部改訂】



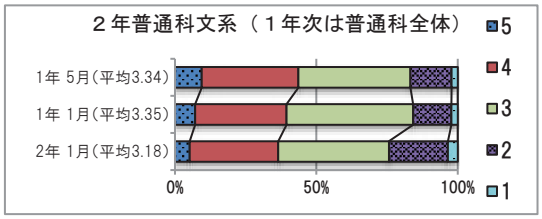
Q．あなたは、課題の解決に向けた有益な考えを構築する力があると思いますか。



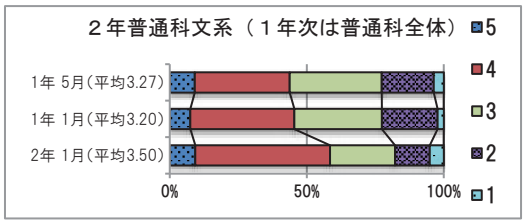
Q．あなたは、新たな価値観や技術を生み出す創造力があると思いますか。【一部改訂】



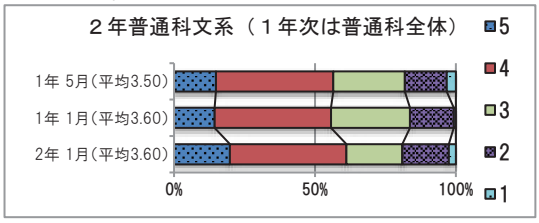
Q．あなたは、課題を進んで解決しようとする行動力や使命感があると思いますか。



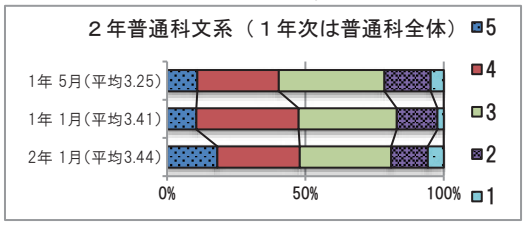
Q．あなたは、身近な地域の事柄や課題に興味・関心がありますか。



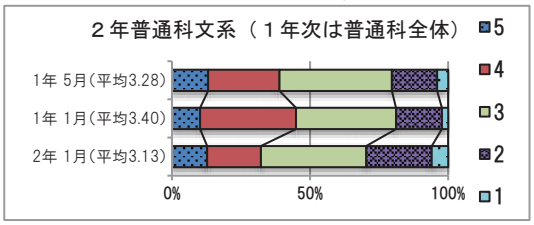
Q．あなたは、国際的な社会課題に興味・関心がありますか。



Q．あなたは、将来、地元地域のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。



Q．あなたは、将来、国際社会のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。



上記の結果から、「物事を論理的に考える力があると思いますか」との質問項目に対して「５：とてもそう思う」「４：そう思う」と答えた生徒の割合は、１学年次に比べてマイナスに動いた。また、「様々な情報を集め、整理する力があると思いますか」「伝えたいことを論理的に発表したりする力があると思いますか」の質問項目においても、「５：とてもそう思う」「４：そう思う」と答えた生徒の割合は、１学年次に比べてマイナスに動いた。「①教員による研究レポート及び発表評価」の「論理的な組み立てがなされているか」「情報源が正しく明示されており、信頼のおける情報を多様に入手しているか」（改変）「情報を整理・分析し、適切に活用できているか」（改変）の評価項目とは相反する結果となった。このような力に対しては、生徒自身の意識の中にはまだまだ自信のなさが窺える。一方で、この質問項目に対する肯定的回答は、例年３年次になると伸びる。２年生で本格的に課題研究に取り組むことで、自らの主張の展開に論理性が欠けることに気がつき、それを改善しようとする意識につながっていることは、むしろ肯定的に捉えるべきことでもあろう。また、「様々な情報を集め、整理する力があると思いますか」「伝えたいことを論理的に発表したりする力があると思いますか」の質問項目において、「５：とてもそう思う」と答えた生徒の割合は、１学年次に比べてプラスに動いており、「情報活用能力」「プレゼンテーション能力」においては、育成された面も見られる。第１学年次、第２学年次での体系的

な学習活動の定着と同時に、情報科の教員や外部指導者と密に連携をとりながら実施した結果の表れではないかと考える。今後は、「客観的根拠に基づいて論理的に考える」力をより一層育成させるための、効果的な指導方法を検討していきたい。

また、「自ら（世の中や身近な生活の中の）課題を見つける力があると思いますか」「課題の解決に向けた有益な考えを構築する力があると思いますか」「新たな価値観や技術を生み出す創造力があると思いますか」「課題を進んで解決しようとする行動力や使命感があると思いますか」との質問項目に対して「５：とてもそう思う」「４：そう思う」と答えた生徒の割合は１学年次に比べてマイナスに動いた。これについては、「①教員による研究レポート及び発表評価」においても高い評価を得ておらず、「課題解決能力」の育成も十分な結果であるとは言えなかった。これについては、先に述べたとおり、来年度は課題研究にかける時間を増やすことで改善したい。今年度はこれまで以上に、インタビュー調査やアンケート調査等の特別調査活動を行うグループが多く見られたことから、生徒の意識が下降したとは考えにくい。今後は生徒たちが実施した文献調査や特別な調査活動を基に、独自な提案ができるように、年間の指導時間を考えていきたい。

「身近な地域の事柄や課題への興味・関心」「国際的な社会課題への興味・関心」については、これまでの生徒と同様、生徒の意識が学年を追うごとに飛躍的に伸びている。特に「身近な地域の事柄や課題への興味・関心」については、「①教員による研究レポート及び発表評価」においても評価されている。また、研究テーマにも見られるように、生徒が「自分ごと」として地域のことを捉えようとしている現れではないかと推察する。これらの意識の変容は、昨年度の分析同様、１年生の「ＳＧベーシックセミナー」も含めて、地域をフィールドとして学習活動に取り組んできた成果であると考える。

「将来、地元地域のために貢献すべきだという使命感を持っていますか」との質問項目に対しては「５：とてもそう思う」「４：そう思う」と答えた生徒の割合は昨年度同様であり、「将来、国際社会のために貢献すべきだという使命感を持っていますか」との質問項目に対しては「５：とてもそう思う」「４：そう思う」と答えた生徒の割合がマイナスに移行した。これらについては、例年２年生の段階ではあまり伸びず、外部に向けての発表や提案をする３年次になってから伸びる項目である。このような項目に対しても、２年次でその素地を作るための取組を強化したい。

今年度は、「『課題研究』教員用指導マニュアル」の作成、ゼミ別集会の開催、ゼミ別教員研修会の開催、アドバイザ教員の選定の工夫など様々な改善を試みたが、まだその取組は道半ばである。次年度以降も全校指導体制をより一層推進し、個々の課題に対して改善を加えながら、生徒たちにとってより有意義な学習活動にしていきたい。

＜今後に向けて＞

「ＳＧ探究」について、〈仮説〉と照らし合わせて俯瞰すると、「論理的思考力」が概ね育成された。このことについては、職員朝礼や職員会議の時間等を利用して、本校全教員に対する共通理解が図れたことにより、教員の課題研究に対する意識が高まり、指導力も向上したことや外国人や大学院生等サポーター等の外部指導者の多面的な指導、また第１学年次の活動、第２学年次での「ディベート演習」と学習活動の体系化がなされ、「論理的思考力」の育成を意識した学習計画が展開されたことが要因であると考えている。そして、本校の学びのスタイルである協働的な学習が定着、深化したことも大きい。当初は、協働的な学習に対して、生徒たちには多少抵抗感が見られたが、徐々に慣れ大部分の生徒が肯定的に取り組んでいる。その結果、全員で意見や考えを共有し、互いに協議しあうことで

論理的思考力が育成されたと考えている。その一方で、「客観的根拠に基づき」「多面的・多角的な視点を取り入れて」論理的に考えることについては、課題が残る。生徒たちの中には意識の向上が見られるが、どのようにして考えればよいのか、不明確な点があることが要因であると捉えている。この点については、今まで以上に、大人の視点から指摘が加えられるように効果的な指導方法を模索していきたい。

また、仮説にある「生まれ育った地域や国際社会に関する、幅広く、深い教養を身に付けさせる」ことについては、達成できたと考えている。このことについては、生徒意識調査に現れており、「身近な地域の事柄や課題への興味・関心」「国際的な社会課題への興味・関心」についての質問項目で、年々生徒の意識が学年を追うごとに飛躍的に伸びている。それに伴って、主体的・積極的に学習に取り組む生徒が大幅に増え、地域や国際社会に関する課題を設定するグループが多く見られるようになり、生徒が「自分ごと」として地域のことを捉えるようになった。これらの意識の変容は、１年生の「ＳＧベーシックセミナー」も含めて、地域をフィールドとして学習活動に取り組んできた成果であると考えている。

続いて、課題研究の評価に関連して、「情報活用能力」については、どの年度も教員からは高評価であった。また、生徒の意識調査は年度によって異なるが、「ディベート演習」においても信頼性の高い情報を扱おうとする高い意識が見られることから、概ね育成されているのではないかと推察する。このことは、第１学年次の活動、第２学年次での「ディベート演習」「課題研究」と体系的に学習がおこなわれたことや、情報科の教員との連携が密にとれていたことが要因であると考えている。

「プレゼンテーション能力」については、当初は原稿の棒読みが多く、相手に伝えるような話し方ができていないとの意見が本校教員や外部指導者から多数挙がったが、年々本校教員や外部指導者からの評価が上昇している。その要因は、昨年度同様、ゼミ別中間発表会、ゼミ別成果発表会前に発表練習時間を捻出したことやグループ内の生徒や外国人や大学院生等サポーター等の外部指導者の多面的な指摘、指導が大きいと考えられる。しかし、研究の進捗が遅れたグループは発表練習が不十分であり、原稿を見ながら発表する姿も見られた。前述のとおり、課題研究の時間が足りていない面もあり、時間数を増やすことで解決できる部分もあると思うが、同時に、長期的な見通しをもった研究を行う能力の育成も必要である。先を見据えた活動をすることができるように、今まで以上にタイムマネジメント能力の育成を図りたい。

また前述したように、身近な地域の事柄や課題への興味・関心が高まったことで、主体的に学習に取り組む生徒が増え、身近な地域の事柄や課題を研究テーマにするグループも多く現れるようになった。第２学年次の「課題研究」は校内研究成果発表会で一区切りとなるが、その後も外部機関・地域とつながり、地域の方々に向けて研究成果を発信するグループも現れた。

このように、ＳＧＨで行った「課題研究」では、生徒たちの様々な能力を概ね育成することができたと考えている。学校設定科目「ＳＧ探究」は教育課程上の特例であるため、本年度で終了するが、ここで得られた知見の多くは今後に生かしていくことができる。これらの取組をより充実した内容とするためには、また課題点もあるが、全教員の共通理解の醸成をより一層図り、全校指導体制を推進し、課題研究や各教科で生徒の主体的な活動を促していきたい。

（４）学校設定科目「ＳＧ探究」における地域・社会と関わりながら学びを深める活動

＜仮説＞

課題研究やディベート演習において、協働的な学習を行うことで、答えの見えない課題に対して粘り強く追究する姿勢や新たな価値あるものを生み出す創造性を育むことができるのではないか。

海外研修や双方向通信システムの利用による海外の高校生等との交流や、国内の大学院生・大学生・留学生との意見交換を行うことで、研究成果を国際社会へ発信できる力を養うとともに、将来グローバル・リーダーとして活躍する意欲や使命感を育むことができるのではないか。

＜研究内容・方法＞

①目標

ア．生まれ育った地域や国際社会の現状についてより一層関心を高め、主体的・積極的に学習する態度を養う。

イ．第２学年で行った課題研究の内容を深化させ、英語による外国人に向けた発表、または地域創生のための具体的な提言事項としてまとめることを通して、他の人に分かりやすく伝えるための論理的思考力・表現力を養う。

ウ．課題研究の成果を地域・社会と関わりながら還元していく活動を通して、将来、地域・社会のリーダーとして活躍するための行動力と、グローバル社会を良く生きる態度と姿勢を育む。

②対象学年・学科

第３学年・普通科

③内容

Ａ　島根大学におけるグローバルセッション

第２学年で行った課題研究の内容を振り返り、その成果を島根大学に在籍する教員・留学生等に英語で発表し、意見交換を行う。また、グローバル化社会をより良く生きる姿勢と態度を育むため、国際社会をテーマとした講演の聴講や、国際協力活動を体験的に学習するワークショップ等を行う。

１）課題研究振り返り、発表内容についてのグループ討議
２）発表用資料作成
３）グローバル化社会をテーマとした講義・演習
４）島根大学在籍の教員・留学生へのプレゼンテーション及びディスカッション
５）振り返り

Ｂ　地域創生に向けた高校生からの提案

第２学年で行った課題研究の内容を、地域創生に向けた提言としてまとめ、出雲市長及び出雲市職員向けにプレゼンテーションすることを通して、研究成果を地域・社会に還元する。

１）課題研究振り返り、発表内容についてのグループ討議
２）発表用資料作成
３）出雲市職員へのプレゼンテーション及びディスカッション

４）出雲市副市長へのプレゼンテーション及び懇談会
５）振り返り

④指導計画

主題	内容	時間
オリエンテーション	オリエンテーション	１
発表内容についてのグループ討議	発表のテーマや内容についての話し合い	８
発表資料の作成	発表用資料（スライド等）の作成	１０
島根大学におけるグローバルセッション、地域創生に向けた高校生からの提言	・グローバル化社会をテーマとした講義・演習、島根大学在籍の教員・留学生へのプレゼンテーション及びディスカッション ・出雲市職員へのプレゼンテーション及びディスカッション、出雲市副市長へのプレゼンテーション及び懇談会	１４
振り返り	振り返り	２

⑤内容の詳細

Ａ　島根大学におけるグローバルセッション

２年前から始まったこのセッションは、今年度が３回目の開催となる。第２学年次に行った課題研究の成果を、国際社会に向けて広く発信する力を養うために、まずは課題研究の内容を振り返り、グループディスカッションを通して内容のブラッシュアップを行った。必要なグループは第２学年次に十分にできなかった資料収集を行い、中には改めてアンケート調査やフィールド調査を行うグループもあった。また、英語で発表するにあたっては、実物資料やポスターを作成するなど、相手に伝わりやすくなるような工夫を凝らした。

また、昨年、一昨年と同じように、英語による発表資料作成にあたっては、島根県国際交流員１名、出雲市国際交流員２名、島根県教育委員会所属の外国語指導助手（ＡＬＴ）１名の合計４名の外国人指導者を招き、アドバイスをしていただいた。

島根大学におけるグローバルセッションの日程は以下のとおりである。

【１日目】（会場：出雲高校）
（午前）・ワークショップ「世界から島根を考える」
講師：独立行政法人国際協力機構島根県国際協力推進員　岩田和美氏
津和野町教育魅力化コーディネーター（青年海外協力隊ＯＢ）
中村純二氏
（午後）・英語プレゼンテーションリハーサル
【２日目】（会場：島根大学）
（午前）・留学生等に向けた課題研究成果の英語によるプレゼンテーション及び意見交換
（午後）・講義「島根大学でできる海外留学」
講師：島根大学国際交流センター教授　青晴海氏
・活動全体の振り返り

昨年度、グローバルセッション第１日目の午後に「対話型コミュニケーション・プレゼンテーションのコツ」と題して島根大学教育学部の香川奈緒美准教授に講演をしていただいていた。その結果、発表に対する客観的な立場からの改善の提案を受けることで、発表

資料の訂正を行ったり、発表の展開に修正を加えたりするグループが多かったが、発表前日とあって時間的余裕がなかった。

そこで、今年度は、香川准教授には事前に２度来ていただいた。１度目は６月１９日に各班リハーサルを行い、この講評とミニレクチャーをいただいた。さらに、上記の講演を発表４日前の７月２３日にも実施していただいた。このことにより、講演を踏まえて発表内容の改善・展開の修正をする時間をある程度確保することができた。

ワークショップでのグループ討議

昨年度に引き続き、２日間の日程のうち、第１日目の会場を出雲高校とし、校内の英語教員の指導によって最終リハーサルを実施した。発表内容の修正を含めた発表準備をするための時間的余裕が生まれ、発表に良い効果を生み出すことができた。

英語によるプレゼンテーション

第２日目の発表は、昨年度と同様に会場を２つに分け、それぞれの会場で各グループ８分間のプレゼンテーションを行った。各グループの発表後に行われる島根大学教員及び留学生との意見交換では、研究内容に関するものばかりでなく、発表の仕方等についても具体的な指摘をいただくことができた。その後、それぞれの発表を評価項目ごとに５段階で評価をしていただき、それぞれの会場での最優秀賞を決定し、表彰を行った。

※発表チーム及びグループ（カッコ内は発表テーマ）

チーム	班名	人数	発表タイトル
A ３５名	政６Ｃ	5	How can foreign pre-school students living in Izumo City have a better life?
	政７Ｃ	6	How can local economies be enriched through the "furusato noze" －benefit your locality tax scheme
	政８Ｂ	6	Let's learn from foreigners how to in herit Japanese traditions.
	食５Ａ	5	Can Soba be accepted in the USA?
	食８Ｂ	3	Why do we wear face masks?
	地５Ｄ	5	Why are there academic achievment gaps
	地６Ｃ	5	Why did woman change from a passive approach to love to a more positive approach to love?
B ３１名	地６Ｂ	5	How can we talk actively with the person who you meet for me first time?
	地７Ｂ	6	How can we increase the profile of Shimane?
	地８Ａ	4	How did happen changes of Japanese folktales?
	地８Ｂ	6	How did the dishes came down foreign countries to Japan change?
	地８Ｃ	5	Why is Izumo dialect no longer spoken?
	地８Ｄ	5	What is the origin of the "Houji-Pan"?

Ｂ　地域創生に向けた高校生からの提案

今年度も昨年度同様に、「島根大学におけるグローバルセッション」と「地域創生に向けた高校生からの提案」を行うグループ分けについては、昨年度末にはすでに生徒たちに希望調査を実施し、それを基に振り分けた。

市役所でのディスカッション

この結果、各班とも市役所での政策提言をある程度イメージすることができており、昨年度に行っていた課題研究の内容の振り返りや、グループディスカッションを通して地域創生に向けた出雲市への政策提言として発表するのにふさわしい内容に再構成することができた

発表用資料の作成にあたっては、政策提言にふさわしいものとなるよう、できるだけ最新のデータを集め、より具体的な内容の提言ができるよう工夫した。昨年同様、文献調査やインターネット調査以外にも、インタビューやアンケート調査を行うグループも多く見られ、意欲的に取り組んでいた。

出雲市長及び出雲市職員へのプレゼンテーション及びディスカッションの日程は以下のとおりである。※市長の代理として副市長へ提案を行う

【１日目】（会場：出雲市役所、出雲高校）
（午前）・出雲市職員へのプレゼンテーション及びディスカッション①（１０グループ）
（午後）・出雲市職員へのプレゼンテーション及びディスカッション②（５グループ）
　　・出雲高校において、ディスカッションの内容まとめ
【２日目】（会場：出雲高校）
（午前）・出雲市副市長へのプレゼン資料作成
（午後）・出雲市副市長へのプレゼンテーション及び懇談会
　　・活動全体の振り返り

昨年度と流れは同様であるが、出雲市役所では発表カテゴリーを１つ増やして５カテゴリーに分け、各カテゴリーで３グループが、それぞれ１５分間のプレゼンを行った。プレゼンの後は、各グループ５０分ずつ市担当職員とのディスカッションの時間をとり、市政の現状と課題の説明や、プレゼンに対する講評をいただいた。

出雲市副市長への提案

その後、出雲高校で、市担当職員とのディスカッションの内容を踏まえ、各グループが副市長への提案内容をまとめた。各カテゴリー１０分間のプレゼンの後、提案に対する講評をいただき、懇談会を行った。

※発表カテゴリー及びグループ

カテゴリー	グループ：第３学年次の課題研究テーマ（市役所の担当課）
環境 （12 名）	①食５Ｂ：出雲市で無料スーパーを実現するには（環境施設課） ②食６Ａ：色を利用して住みよい街をつくれるのか（商工振興課） ③政８Ａ：出雲市の食品ロスを減らすには（環境施設課）
観光・交通 （14 名）	①地７Ｃ：島根の観光でお金をかけずに観光振興は可能なのか？（観光課） ②政６Ｂ：『ばたでん』の魅力をより高めるためには行政（出雲市）にできることは？（交通政策課）

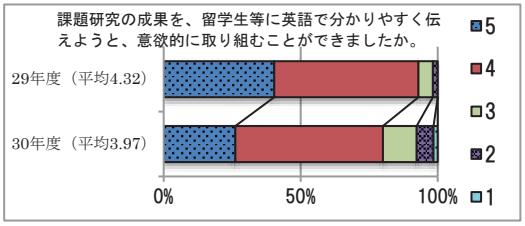
	③政５Ｂ：出雲市を活性化するにはどうすればよいか？（観光課）
健康・食農 （15 名）	①食６Ｂ：自分たちの身近なところの地産地消を進めるには～島根県産米に着目して～（農業振興課） ②地５Ｂ：出雲での地産地消を推進させるにはどうすればよいのか？（農業振興課） ③食７Ｂ：郷土料理を将来に残していくために私たちができることは？（健康増進課）
地方活性化 ・国際交流 （15 名）	①政７Ａ：ギリシャをホストタウンとして誘致することで、出雲市を活性化させよう！（文化スポーツ課） ②地７Ａ：出雲市に外国人観光客を増やすには（観光課） ③地５Ｃ：2020 年東京オリンピックにおいて出雲市がホストタウンになれば出雲市を元気にすることが出来るか？（文化スポーツ課）
環境 ・外国人定住 （15 名）	①政５Ｃ：島根県で太陽光発電をよりよく活性化するためには（産業政策課） ②地７Ｄ：ペットボトルキャップの利益を出雲市に役立てよう（文化国際室） ③地６Ｄ：定住している外国人がより過ごしやすい出雲にするためにはどうすればよいか？（文化国際室）

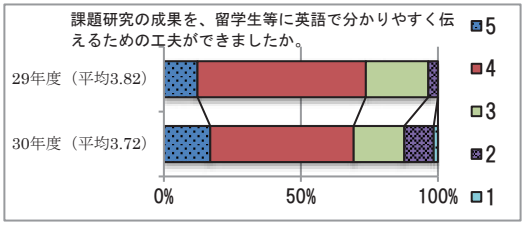
＜検証＞

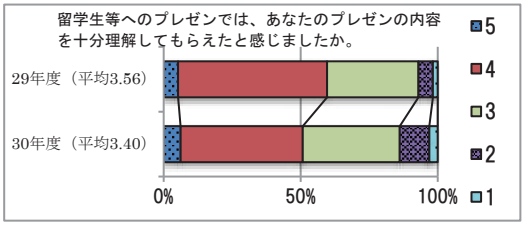
①アンケート結果より

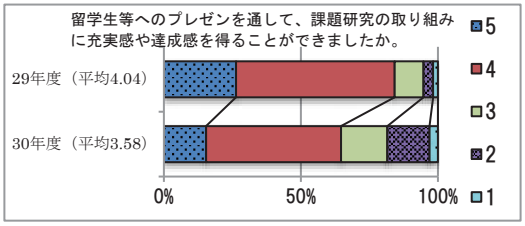
Ａ　島根大学におけるグローバルセッション

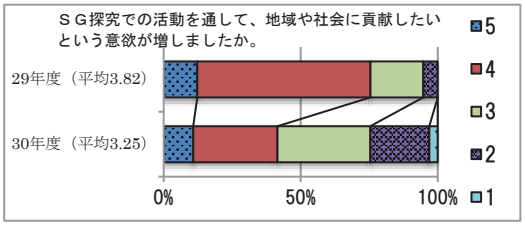
実施後のアンケート結果は以下のとおりである。回答基準は（５：とてもそう思う、４：そう思う、３：どちらでもない、２：あまり思わない、１：全く思わない）の５段階とした。











○自由記述欄からの抜粋

・日本人でも理解しにくいふるさと納税の仕組みを、それを聞いたこともない留学生にどうやって説明するかに苦心した。

・各授業にそれぞれ何をしなければならないのかということを（班）全員が共有していないと無駄な時間が生じる。
・一つの事柄について深く調べたので、それが、政治・経済・文化・国際関係・科学・歴史・語学・などほかの分野の学問とのつながりが必ずある。そのように広い視点でみることが大学の学びでも生きるのではないか。
・先生（校内アドバイザ)、外部講師の方々の考えを統一してほしい。校内の先生の「社会に役立てられると良い」という発言をもとに研究を完成させたが、その後の寸評で「社会に役立てようと考えすぎ。もっと自由に」といわれ、プレゼンについて外部講師の先生は「グローカルな研究を」といわれた。
・テーマを決定した後、「そのテーマで何が解決したいか考えてほしい」とか、留学生にその研究を伝えてどうしたいのか、何か関連性があるのかといった、テーマは何を基準にしてどこを目標として考えればいいのかの指示が二転三転してよくわからなかった。そこを最初のＳＧの時間ではっきり提示した方がいいと思う。
・学校生活で生じる様々な問題を、一つの手段で解決するのではなく、多様な手段・方法で解決することでＳＧの学習を生かせたらいいと思う。

アンケート結果からは、全ての質問項目について昨年度と比較すると同程度かやや低くなったと見ることができる。

ただし、一昨年度と比較すると、おおむね微増もしくは同等で、「課題研究の成果を、留学生に英語で分かりやすく伝えるための工夫ができましたか」という質問については一昨年度（Ｈ２８）の平均値が３．５６に対してやや増の３．７２（Ｈ３０）となっていることから、昨年度が大きく数値を伸ばしたと見ることができる。これは、昨年度、プログラムの中に、出雲高校校内での活動を取り入れる、香川准教授の講義を発表前日に組み込むなどの大きな改善があったためである。

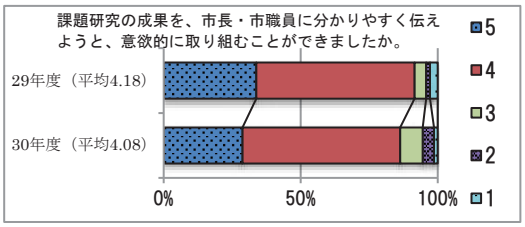
今年度は、香川准教授の講義の日程をより前段階に動かし、リハーサルの回数も増やした。リハーサル→助言・指導→修正・改善→リハーサルというサイクルの回数を増やしたことは、「課題研究の成果を、留学生に英語で分かりやすく伝えるための工夫ができましたか」の質問に対して「５：とてもそう思う」という回答が昨年度よりも増加したことに表れている。こちらは、昨年度「リハーサルの時間がもっと必要だと感じた」といったアンケート記述を踏まえての改善である。

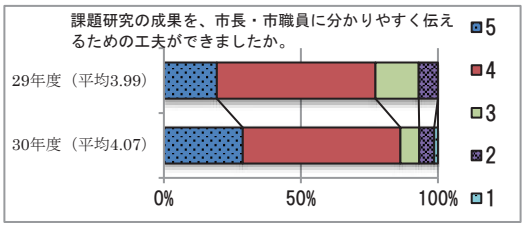
一方で、「ＳＧ探究での活動をとおして、地域や社会に貢献したいという意欲が増しましたか」という質問に対しては、肯定的な回答が減ることになった。これは、英語プレゼンテーション能力の向上に力を入れたことにより、研究や提案内容の改善にかける時間が減り、この取り組みの本来的な意義や目的が十分に伝わらなかったことが影響を及ぼしたとみられる。研究や提案そのものの改善と、英語によるプレゼンテーションの改善について、バランスのとれた指導計画とすることは、次年度に向けた課題と言える。

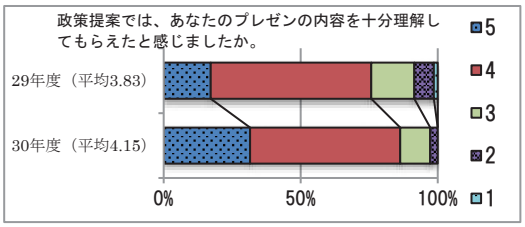
課題となる部分もあるが、「２年次に課題研究で取り組んだ内容を、英語でのプレゼンテーションする」という取り組みは生徒にとっては大きなハードルであり、これを乗り越えていくことは、生徒の意識改革が確実につながっていると思われる。島根大学に多大な協力をいただくことで充実したプログラムを構成することができ、生徒にとっては大変有意義な学習を行うことができたと考える。

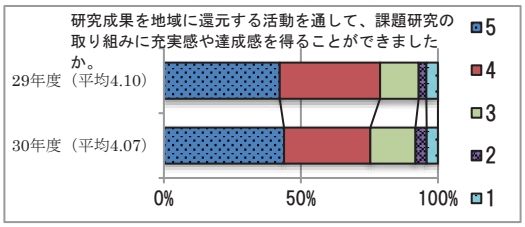
B　地域創生に向けた高校生からの提案

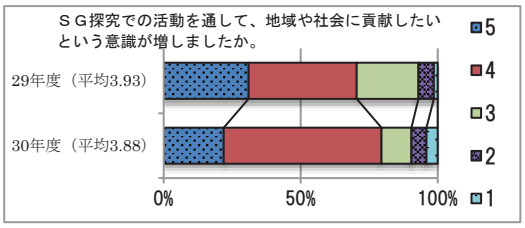
実施後のアンケート結果は以下のとおりである。回答基準は（５：とてもそう思う、４：そう思う、３：どちらでもない、２：あまり思わない、１：全く思わない）の５段階とした。なお、昨年度、前年度生が先行実施した後のアンケート結果と比較する。











○自由記述欄からの抜粋

・調べれば調べるほど課題が増えていったため、提言が理想論にならないよう、いろいろな角度から解決策を見つけるのが難しかった。
・文献やネット調査だけでなく、実際に現地の人に聞いてみたり、実験を行うことが大切だと思う。自ら体験したことは、自信を持って発表できると思う。現地の人の意見は説得力がある。
・身の回りにあることをまず興味や関心を持つ姿勢が１番大切で、その上で疑問を感じたことについては積極的に調べたり学んだりすることが必要だ。
・一人一人が自らの主張を述べ、そこで意見が異なる者とのディスカッションを行うことで、新たに発見が生まれ、今までとは違った観点から結論に導くこともあるので、まずは全員が協力して意見を述べることが重要。

昨年度のアンケート結果は、全ての項目について、「５：とてもそう思う」、「４：そう思う」と肯定的に答えた生徒の割合が前年度より上昇し、平均値も高まっていた。今年度は全般的に見て昨年度とほぼ同等か微増の数値を示している。

特に「課題研究の成果を、市長・市職員に分かりやすく伝えるための工夫ができましたか」および「政策提案では、あなたのプレゼン内容を十分理解してもらえたと感じましたか」という質問に対しては、肯定的な回答は昨年度よりもさらに増加した。自由回答にも「文献やネット調査だけでなく、実際に現地の人に聞いてみたり、実験を行うことが大切だと思う。自ら体験したことは、自信を持って発表できると思う」とあるように、アンケートやインタビューを行う班が昨年同様に多く見られた。

「ＳＧ探究での活動をとおして、地域や社会に貢献したいという意欲が増しましたか」という質問に対して、全体的な数値はやや減少しているが、「５：とてもそう思う」、「４：そう思う」という肯定的な回答数は増加した。政策提言という創造的かつ実践的な形のプレゼンテーションをしているためか、地域社会の様子を知り、さらに地域に貢献したいと考える生徒が多くなっている。

例えばある班では、２年次の課題研究「食品ロスを減らすために私たちができることは何か？」を地域政策提言の形にアレンジし、「出雲市の食品ロスを減らすには」というタイトルで発表を作成した。この班は、調査研究によって、日本の食品ロスの大半は家庭における可食部の過剰除去が原因であるという結果を得た。そして、自分たちにできる問題解決案を班内で話し合い、その提案として食品ロスの実情、主な原因である可食部の過剰廃棄を減らすためのレシピを記載したポスターを作成し、出雲市役所、出雲市駅、市内のコミュニティセンターなどに掲示することを挙げた。さらに、これらは実践に移され、実際に各施設の許可を得て７～９月の間、掲示された。この取り組みには、情報収集・分析と問題解決案の提示にとどまらず、実践に移そうとする意欲が形成されていることが見て取れる。これをモデルケースとして、「学びから実践へ」という形をとる班が増えれば、地域社会へ貢献という意識・意欲をいっそう高めることが期待できよう。

政８Ａ班作成のポスター①

政８Ａ班作成のポスター②

また、副市長や市職員の方々には、これらのプレゼンテーションひとつひとつを真摯に受けとめ、アドバイスやディスカッションをしていただいた。このことは、生徒達に達成感を与えるとともに、より高次元の問題意識に目覚める機会になったと思われる。

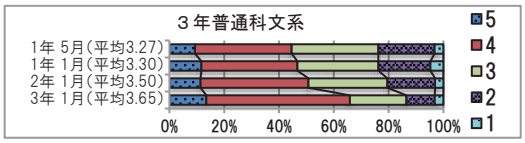
課題としては、副市長の講評にあったように「問題をより深く掘り下げる」ということに尽きるのではないか。実現可能な提案かどうか、例えば、市役所公式サイトの映像やＳＮＳのアレンジ案を作成する、施設設営を提案する場合は、具体的な数値の予測や候補地を探すなど、副市長・市職員の方々を唸らせるような提案作成ができるように指導体制を構築していくことが重要であろう。

②生徒意識調査より

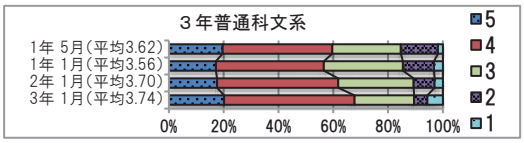
生徒意識調査（「Ⅳ　研究開発の評価」参照）のうち、仮説検証につながる質問項目についての結果は以下のとおりである。意識調査の回答基準は（５：とてもそう思う、４：そう思う、３：どちらでもない、２：あまり思わない、１：全く思わない）の５段階である。

なお、「１年５月・１月」は H28 年度に行った調査結果で学年全体。「２年１月」は H29 年度に行った調査で文系クラスを抽出したもの。「３年１月」は H30 の文系クラスを抽出したものである。

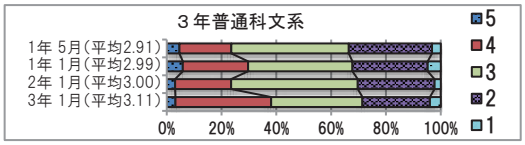
Q．あなたは、身近な地域の事柄や課題に興味・関心がありますか



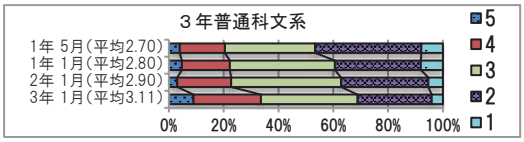
Q．あなたは、国際的な社会課題に興味・関心がありますか



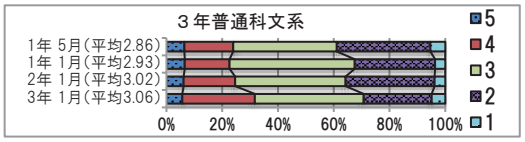
Q．あなたは、物事を論理的に考える力があると思いますか。



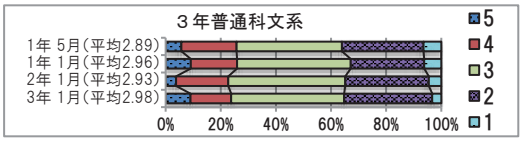
Q．あなたは、伝えたいことを論理的に伝えたり発表したりする力があると思いますか。



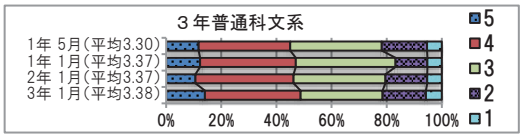
Q．あなたは、自らの考えや成果を的確に情報発信する力があると思いますか。



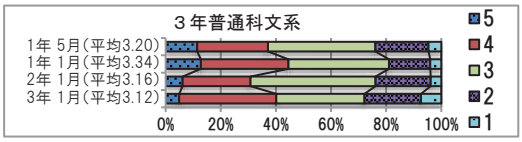
Q．あなたは、新たな価値観や技術を生み出す創造力があると思いますか。



Q．あなたは、将来、地元地域のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。



Q．あなたは、将来、国際社会のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。



今年度も昨年度以上に「身近な地域の事柄や課題への興味・関心」に大きな伸びが見える。「将来、地元地域のために貢献すべきだという使命感」も学年を追うごとにプラスの方向へ動いている。このことから、地域社会の課題を解決していこうとする意欲・意識を育むことができている。さらに、「国際的な社会課題への興味・関心」も同様の動きを見せている。「国際社会のために貢献すべきだという使命感」については、進路選択の状況が明確になってきていることもあり、「２：あまり思わない」および「１：全く思わない」の否定的評価も増加しているが、「５：とてもそう思う」および「４：そう思う」肯定的評価は２年次よりも大きく伸びている。このことから、「将来グローバル・リーダーとして活躍する意欲や使命感を育む」という仮説は概ね実証できたものと考えられる。

また「物事を論理的に考える力」とそれを「伝えたり発表したりする力」、さらには「自らの考えや成果を的確に情報発信する力」があると答えている生徒が２年次から３年次に

かけて大きく増加している。論理的思考力・表現力・コミュニケーション能力の伸びを生徒が実感しているということになる。このことは、「答えの見えない課題に対して粘り強く追究する姿勢」につながるもので、その育成という仮説を証明するものといえよう。

一方で、「新しいものを生み出す創造力」については、あまり意識の変容が見られなかった。これまで述べたように、本年度も生徒による新たな発想が多くあり、各方面で評価もされている。一方で「新しいものを生み出す創造力」があるかと問われると、それを実感するだけのものとはなってはいないのだろう。

＜今後に向けて＞

３年生の学校設定科目「ＳＧ探究」において、地域・社会と関わりながら学びを深める活動を通じて、協働的な学習を行い、課題に対して粘り強く追究することにより、自らの考えを持つことができるようになってきた。それが「新たな価値あるものを生み出す創造性」とまで言えるかには疑問も残るが、一定の成果はあったと言えよう。

また、国内外の大学教員や行政職員、留学生等との意見交換を行うことは、研究成果を国際社会へ発信できる力を養うとともに、将来地域や社会の核となるグローバル・リーダーとして活躍する意欲や使命感を育むことに大きく資するものであると言える。

学校設定科目「ＳＧ探究」は教育課程上の特例であるため、本年度で終了するが、ここで得られた知見の多くは今後に生かしていくことができる。来年度以降も、このような取組を通じて、生徒の能力や意欲等の向上に務めたい。

（５）スカイプを利用した海外の高校生との意見交換

＜仮説＞

海外研修や双方向通信システムの利用による海外の高校生等との交流や、国内の大学院生・大学生・留学生との意見交換を行うことで、研究成果を国際社会へ発信できる力を養うとともに、将来グローバル・リーダーとして活躍する意欲や使命感を育むことができるのではないか。

＜研究内容・方法＞

①目標

ア．課題研究を進める過程において、海外の高校生とスカイプを利用した継続的な意見交換をすることを通して、国際的な視野から自らの研究を振り返る機会とする。

イ．海外研修における課題研究の成果発表及び意見交換が円滑に進むよう、事前に互いの文化的背景や生活習慣を知る場とする。

ウ．英語を使った意見交換を行うことで、自らの英語力を評価し、英語による表現、聞き取りの力を高めるための意欲・態度の醸成を図る。

②対象学年・学科

第２学年・普通科（希望者）

③内容

１）海外研修で交流する高校とのスカイプを利用した英語による意見交換

２）課題研究の内容についての英語による発表の準備

④指導計画

第１回：平成３０年１０月　２日（火）　　７：３０～８：１０

第２回：平成３０年１１月１５日（木）　　７：３０～８：１０

第３回：平成３０年１２月　６日（木）　　７：３０～８：１０

第４回：平成３０年１２月１３日（木）　　７：３０～８：１０

※サンタクララ海外研修：平成３１年　１月１９日（土）～２６日（土）

⑤内容の詳細

１）事前の交流活動

ＳＧＨに指定された平成２６度から継続的な取り組みとして、海外研修で訪問を予定しているアメリカ合衆国サンタクララ市のウィルコックス高校の生徒とスカイプを利用した意見交換を行っている。

ウィルコックス高校の生徒と交流する生徒たち

ウィルコックス高校訪問時には、授業参加と課題研究の発表を行うため、訪問前にお互いを知るための交流会を４回行った。お互いに初対面であるため、お互いの自己紹介をしながら交流を進めていった。

５年目になる取組ではあるが、当然ながら、該当生徒にとっては初めての体験であり、新鮮さと緊張感はある。初回などは固い雰囲気の中で進んでいくが、回を経るにつれて打

ち解けていき、意欲的にコミュニケーションをとろうとする姿勢が見えてきた。

２）課題研究について発表の準備

２学期以降不定期ではあるが、放課後にミーティングを行ったりして、ウィルコックス高校訪問時に行う課題研究発表の内容について話し合いを行った。

スカイプ交流を行っているウィルコックス高校の生徒は全て第２外国語として日本語の授業を選択しており、スカイプによる事前の交流活動を通じて、日本の歴史・文化や日本語に強い興味・関心を持っていることが分かった。そのことを踏まえながら、海外研修に参加する１６名を５グループに分け、それぞれのグループが普段行っている課題研究のテーマの中から、ウィルコッス高校の生徒の興味・関心を引く以下のテーマを選んだ。

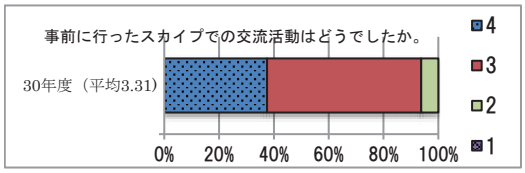
※サンタクララ海外研修で発表する課題研究テーマ

① The best assembly of wave-dissipating blocks.
② Comparison of Shimane prefecture's nature and that of Santa Clara
③ There is a close connection of between diet and health.
④ Let's brainwash ourselves
⑤ The problem of foreign workers

＜検証＞

①アンケート結果より

実施後のアンケート結果は以下のとおりである。回答基準は（４：とても有意義だった、３：まあまあ有意義だった、２：あまり有意義ではなかった、１：まったく有意義ではなかった）の４段階とした。



○自由記述欄からの抜粋

・自分の英語力に不安があり、積極的に会話することができなかった。しかし、事前に顔を知ることができ、Wilcox 高校での交流はスムーズに行えた。
・メールやスカイプを通して Wilcox 高校の人とコミュニケーションをとることで、ホームステイをする前に現地の人と交流できて良かったです。もっとスカイプの回数をふやしてほしいです。
・普段使うことのないスカイプを使って交流することは、果たして普通に会話できるのか心配していたけど、声だけでなく、表情も分かるので文章のやりとりよりもコミュニケーションがとりやすいと感じた。
・実際に会って話す前に、サンタクララの生徒さん達と交流を図れたのは、お互いの緊張をほぐし、落ち着いて会話できるようにするための良い機会であったように思います。しかし、お互いに黙ってしまう時間が少しあったけど、せっかくの時間を有意義に使うことができていないときも少しあったので反省します。

・何を話せばいいのか困ったことが多かったです。もっと日本人が積極的になったほうがいいなと思いました。また、イスに順番に座ると後ろの人が隠れたり、消極的になってしまうので、スカイプのカメラにうつればいいくらいの範囲でラクにみんなが話しやすい体形になったほうがいいなと思いました。

事項で述べるサンタクララ海外研修の事前活動としてスカイプ交流を実施することは、次のような意義がある。①事前に現地の様子・雰囲気がつかめること。そして、②自らのコミュニケーション能力や英語力の課題を実感し、渡航までに修正しようとすることである。事前交流が研修の効果を高めると言うことは、ここ数年の取り組みと成果を見ても明らかである。

今年度は「２：あまり有意義ではなかった」と回答した生徒（１名のみ）は「人数が多すぎて混乱していた」という記述をしており、使用教室の環境面で不便を感じたということは課題となる。また、ウィルコックス高校側の教員（指導担当）からもスカイプ交流の困難性を指摘されている。例えば、「機材の不調トラブルが時々ある」「課題についての質問のやりとりがスカイプでは深まりにくい（会話であると出雲高校生側の意図がウィルコックス高校の生徒に伝わりにくい)」「学校行事との兼ね合いでスカイプのみでは十分な交流ができない」などの指摘である。特に、課題研究について会話形式での質疑であると深まりにくいため、文書形式の交流もあったほうがよいという指摘が重要である。時差の関係で課外時間での交流になるなど、制約が多い中、内容的な深まりのある交流にして行くにはスカイプだけでは不十分で、他ツールの利用などの検討も必要である。「表情も分かるので文章のやりとりよりもコミュニケーションがとりやすいと感じた」という生徒もいるので、文章によるやりとり、直接対話型のやりとり等、複数の媒体を効果的に組み合わせることが改善とつながるのではないか。

＜今後に向けて＞

スカイプという双方向通信システムの利用により、海外の高校生等と交流することは、研究成果を国際社会へ発信できる力を養うことに十分に資するものと考える。ただし、参加生徒はサンタクララ海外研修に向けての取組の一環としてその有用性を認めており、海外研修なしでの単体での運用効果には疑問が残る。

今後も海外研修に合わせて、直接対話型だけでなく文章によるやりとり等も加えることで、より効果的な取組になるのではないか。

（６）サンタクララ海外研修における研究成果発表及び意見交換

＜仮説＞

海外研修や双方向通信システムの利用による海外の高校生等との交流や、国内の大学院生・大学生・留学生との意見交換を行うことで、研究成果を国際社会へ発信できる力を養うとともに、将来グローバル・リーダーとして活躍する意欲や使命感を育むことができるのではないか。

＜研究内容・方法＞

①目標

ア．海外の研究機関やグローバル企業等を訪問することを通して、国際社会の現状についての関心を高め、グローバルな視野の拡大を目指す。

イ．現地の中等・高等教育機関の学生との意見交換を通して、国際的な社会課題をテーマとした課題研究について海外の視点から評価を行う。

ウ．海外の人々との交流活動を通して、異文化に対する理解を深めるとともに、英語を使ってコミュニケーションしようとする態度と能力を高める。

エ．継続的な連携関係を続けていくためのネットワークを構築する。

②対象学年・学科

第２学年・普通科（希望者）

③内容

１）参加生徒募集及び選考

・一次審査：志望理由書の提出、英語基礎力テスト、小論文テスト

・二次審査：日本語による個人面接、英語による個人面接

２）事前研修

・スカイプを利用した意見交換（全４回、「（５）スカイプを利用した海外の高校生との意見交換」を参照のこと）

・各研修先についての事前調査

・ウィルコックス高校における課題研究成果発表に向けた事前学習（全６回）

３）海外研修

・ウィルコックス高校訪問（課題研究成果発表、生徒との意見交換、授業参加）

・スタンフォード大学訪問

・ミッションコミュニティカレッジ訪問（授業参加、学生との意見交換）

・SONY 訪問

・サンタクララ市役所訪問（市議会での決意表明）

サンタクララ市役所を訪問

④指導計画

１）参加生徒募集及び選考

平成３０年　４月１９日（水）　参加生徒募集

～　５月　９日（水）

５日１７日（木）　選考試験＜一次審査＞

６月１１日（月）　選考試験＜二次審査＞
～１３日（水）
６月２０日（水）　参加生徒決定

２）事前研修
平成３０年１０月　２日（火）　スカイプを利用した意見交換（全４回）
～平成３０年１２月１３日（木）
平成３０年１０月３０日（火）　課題研究成果発表に向けた事前学習（全６回）
～平成３１年　１月１１日（金）
１２月　１日（土）　保護者及び参加生徒説明会

３）海外研修
平成３１年　１月１９日（土）　７泊８日の研修
～　１月２６日（土）

⑤内容の詳細

１）参加生徒募集及び選考

指定２年目から、サンタクララ海外研修は、年間を通じた「グローバル・リーダーシップ・プログラム」の一環と位置付けている。参加生徒の募集にあたっては、これまでと同様の以下の条件を文書で示し、募集にあたった。

【グローバル・リーダーシップ・プログラムへの参加条件】
①国際社会についての関心が高く、国際的な社会課題について自ら解決していこうとする意欲に溢れる生徒
②英検準２級～２級程度以上の英語力を有する生徒
③スカイプを利用した意見交換会、各種リーダー研修、英語４技能育成プログラム・ＧＴＥＣ－ＣＢＴ受験等への参加意欲のある生徒
④プログラム実施後も継続して自己研鑽・自己啓発活動を続けていく意欲のある生徒
⑤出雲高校の代表として様々な活動をするのにふさわしい、規律正しい行動のできる生徒
※すべて、参加者選考の際の選考規準とする。

参加生徒募集後、以下の内容の選考試験を行い、海外研修（グローバル・リーダーシップ・プログラム）への参加者１６名（男子７名、女子９名）を決定した。

【選考試験の内容】
＜一次審査＞①志望理由書の提出（日本語による記述）
・このプログラムに応募した理由
・このプログラムを通して身に付けたいこと
・このプログラムで身に付けたことを将来どのように生かしていきたいか
②英語基礎力テスト（ペーパー試験）
③小論文テスト（国際的な社会課題をテーマとする。８００字以内）
＜二次審査＞①日本語による個人面接
・自らが関心を抱いている国際的な社会課題について
・このプログラムを通して身に付けたいこと
・将来の夢、取り組んでみたいことの具体例　　など
②英語による個人面接

２）事前研修

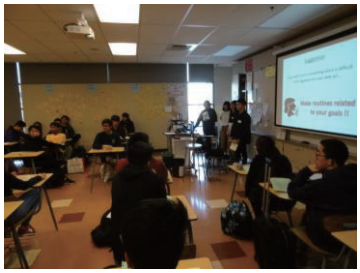
事前研修として全４回のスカイプを利用した現地ウィルコックス高校の生徒との意見交換会を行った（「（５）スカイプを利用した海外の高校生との意見交換」参照）。

一昨年度からの新たな取組として、外部から講師を招へいしてウィルコックス高校で行う課題研究成果発表に向けた事前学習をより体系的に行うこととしている。昨年度に引き続き、本年度も全６回実施し、出雲市役所の国際交流員のジリアン＝アダムズ氏をお招きして以下の内容の学習を行った。

・第１回（１０月３０日）：課題研究の内容を深めるアドバイスをいただき、また、英語プレゼンテーション作成の指導を受けた。最後には英語でプレゼンをし、質疑応答も行った。
・第２回（１０月１１日）：課題研究の内容について、前回のアドバイス・指導を踏まえて修正したプレゼンテーションへアドバイスをいただいた。
・第３回（１１月１３日）：日本のことを必ずしも全て理解しているわけではない外国人にとって分かりやすい内容となるよう、プレゼンテーション内容の詰めを行った。
・第４回（１２月　４日）：プレゼンテーションの流れと想定される質疑応答等について確認をした。外国人にとって知りたいと思える内容について、意識を巡らせることができるようになってきた。
・第５回（１２月１８日）：発話の仕方や間の取り方等も意識して、プレゼンテーションの練習を行った。また、冬休み中にしておくべき事項について確認をした。
・第６回（　１月１１日）：これまでの反省を踏まえて、プレゼンの最終リハーサルを行い、本番までにさらに修正すべき点を明確にした。

３）海外研修

以下の日程で、サンタクララ海外研修を行った。せっかく事前にスカイプでの交流を行うなど時間をかけて準備をしていながら高校で過ごす時間が少ないとの反省を受け、昨年度からウィルコックス高校での活動時間を拡大した。


ウィルコックス高校での発表

ミッションカレッジでの授業

また、昨年度に引き続き、現地の短大を訪問し、授業を受けたり、意見交換をしたりすることができる時間を確保した。

【サンタクララ海外研修日程】

月日	訪問先等	現地時刻	実施内容
1/19	・出雲高校発	(10:30)	
（土）	・出雲空港発	(12:35)	JAL２８０便
	・羽田空港着	(13:45)	
	・羽田空港発	(19:45)	JAL００２便

	・サンフランシスコ空港着 ・ウェルカムパーティー	12:10 15:00	 サンタクララ姉妹都市協会、ホストファミリーやウィルコックス高校生徒と交流
1/20 （日）	・ホームステイ先家族と行動		
1/21 （月）	・SONY 見学 ・スタンフォード大学見学	10:00 12:30	SONY Electronic inc.新田嘉一氏の講演 施設視察
1/22 （火）	・ウィルコックス高校 ・交流会	7:30 16:00	授業参加、課題研究成果発表・意見交換
1/23 （火）	・サンタクララ市役所 ・ウィルコックス高校 ・サンタクララ大学	8:30 10:20 15:00	見学 授業参加 見学、聴講
1/24 （水）	・サンタクララ警察署見学 ・サンタクララ市役所 ・ミッションコミュニティカレッジ	8:30 10:00 11:30	施設見学 議員への決意表明・交流 講義への参加・施設見学
1/25 （木）	・サンフランシスコ空港発	15:00	JAL００１便
1/26 （金）	・羽田空港着	19:15	
1/27 （土）	・羽田空港発 ・出雲空港着 ・出雲高校着	10:20 11:40 12:30	JAL２７９便

＜検証＞

①アンケート結果より

自由記述より抜粋

・ウィルコックス高校での授業参加では、日本とは違った環境を肌で感じることができて、とてもよかった。ＳＯＮＹでは“仕事”というものに対する大手企業のとらえ方が分かって新鮮だった。また、全日の日程が午後４時などに終わるので夜の時間を家族で過ごせ、１日フリーの日以外も楽しく交流できました。

・ウィルコックス高校の授業参加は、日本とは違う環境や授業スタイルで授業中に遠慮無く質問が飛び交っていたことに刺激を受けた。ホームステイは、流石に初日は緊張したけれど、ファミリーが寛容というのもあってすぐに慣れることができた。コミュニケーション能力を高めるには絶好の機会だと思った。

・研修中の行事の中で、私はウィルコックス高校での授業参加にとても刺激を受けました。生徒さんたちと意見交換をしたり、学食も食べたりとアメリカでのスクールライフを楽しむことができました。また、英語を学ぶのではなく、英語を単なるコミュニケーションツールのひとつとして別の何かを学ぶと言うことを初めて経験し、自分の英語力の未熟さを感じまし

た。そして、何のために英語を学んでいるのかを再認識させられました。来年この研修に参加する生徒達にも必ず良い刺激になると思います。
・校内成果発表会での報告は、まじめな要素と楽しい要素を織り交ぜた良い発表になった。それぞれが堂々と発表していて、研修で殻を破れたように感じた。
・自分から発言し行動をする大切さを学んだ。今回の研修では、私は外国人と交流したことのある経験値が高いアメリカ人と仲良くなったので、話をふってくれたり気を遣ってくれたりしたが、自分がどうしたいのかを常に考えて意見を持たないと先に進めないことを知った。普段は優柔不断で通用していた。「あなたはどうしたいのか」と尋ねられたとき「なんでもいい」という答え方にならないよう考えることを怠らず、自分の気持ちの思うままに発言することが少しでもできるようになったと思う。
・今回の研修を通して、これまで全く考えていなかった「大学で留学する」ということを決めた。元々大学では、外国語を中心に学びたいと思っていたが、今回の研修から、日常会話も英語だと、自分のスキルもより上がるのではないかと思った。また、留学以外のことでは、自分の生活態度が少し変わった。物事を少しは自分から積極的にするようになったので、これからも続けていきたい。
・リーダーとしての自覚が生まれ、周りを見て行動ができるようになった。海外研修では英語を使ってのコミュニケーションが正しくできるか不安だったが、自分が伝えようと努力すると、相手も気持ちをくみとってくれ、自分の伝えたいことが、しっかり伝えられた。このことから、確かに文法や語句は大事だが、まず伝えようとるす気持ちが大切だと感じた。
・「ためらう」ことをなくして、もっと主体的になりたい。ウィルコックスの生徒はとても聞き上手だったので、良い環境だった。これからも意見を言ったり聞いたりすることがあるが、それをしやすい環境作りはすぐにできると思う。今回の研修で積極性は自分の中で持つべきものから、持たなければならないものになった。
・企業訪問については、「体験」ポイントをおいて行って欲しい。また、高校に行く時間を増やして欲しい。もっとディスカッションの要素が増えた方が生徒への刺激になり、変わるきっかけになると思う。

研修後のアンケートでは、回答基準は（４：とても有意義だった（とても良かった）、３：まあまあ有意義だった（まあまあ良かった）、２：あまり有意義ではなかった（あまり良くなかった）、１：まったく有意義ではなかった（よくなかった））の４段階としたが、昨年度に引き続き本年度も、参加生徒全員がこの研修を「４：とても有意義だった」と答えた。課題研究発表に限らず、グローバル企業訪問、大学・短大訪問、市役所訪問などあらゆる場面において、生徒たちは積極的に質問したり、意見交換したりする姿勢が見られた。アンケートではすべての研究項目で、ほとんどの生徒が「とても良かった」「まあまあ良かった」と回答しているが、特に現地高校での授業参加及び交流活動では８０％以上の生徒が「４：とても良かった」と回答した。

一昨年度の反省を受けて昨年度は現地高校への訪問日数を１日半とした。本年度も同じ日程を考えていたが、現地の祝日の関係により、高校への訪問日数を１日とせざるを得なかった。一昨年度以上の活動時間を確保したが、「もっと高校での時間が欲しかった」と回答する生徒が複数おり、この研修の中心が現地高校を訪れての課題研究発表や授業参加、交流活動等であることが分かる。

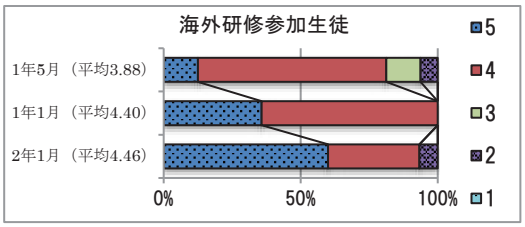
この研修を通じて異文化体験をすることにより、生徒たちの中には今まで持ちえなかったようないろいろな感情や思いが生まれたようだ。自由記述意見欄には自らの意識の変容

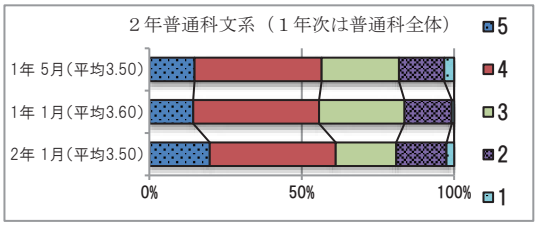
について、ページの関係でここには記載しきれないほど多くの記載があった。また、帰国後に１、２年生全員の前で行っている研修報告についても、毎年の行事として定着し、他の生徒への波及効果が期待できるものとなってきている。

②生徒意識調査より

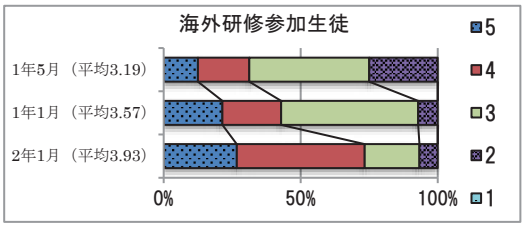
生徒意識調査（「Ⅳ　研究開発の評価」参照）のうち、仮説検証につながる質問項目についての結果は以下のとおりである。意識調査の回答基準は（５：とてもそう思う、４：そう思う、３：どちらでもない、２：あまり思わない、１：全く思わない）の５段階である。

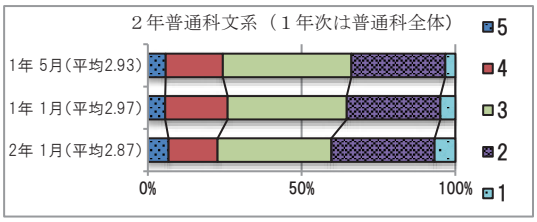
Q．あなたは、国際的な社会課題に興味・関心がありますか。



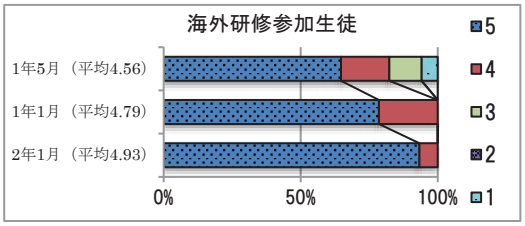


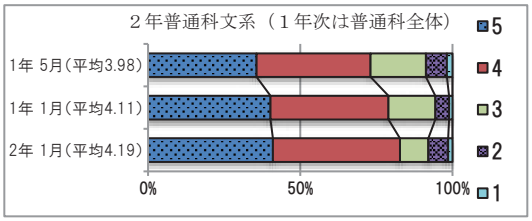
Q．あなたは、自ら考え、調べたことを広く情報発信する力があると思いますか。



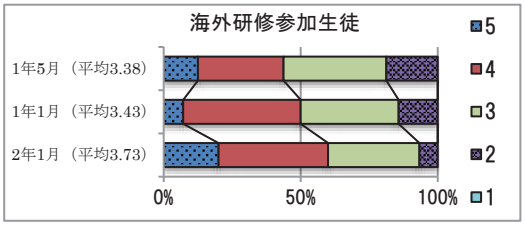


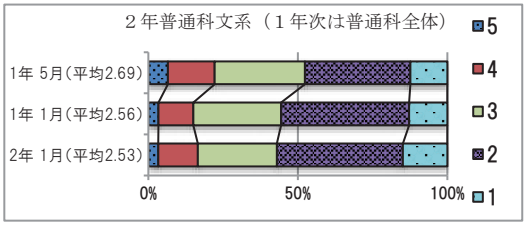
Q．あなたは、英語を使ったコミュニケーションが大事だと思いますか。



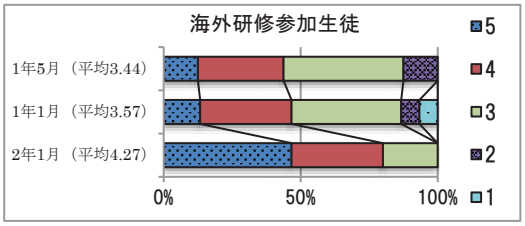


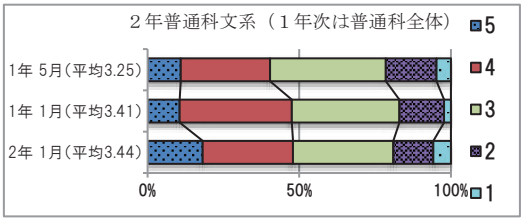
Q．あなたは、英語を使ったコミュニケーション能力があると思いますか。



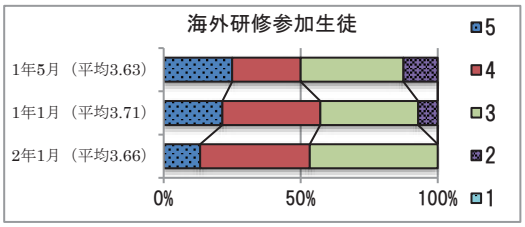


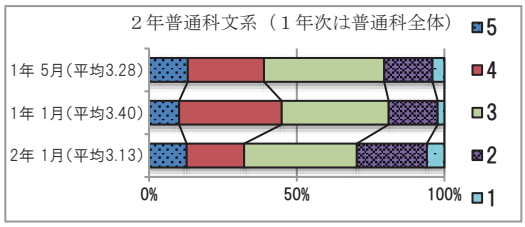
Q．あなたは、将来、地元地域のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。





Q．あなたは、将来、国際社会のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。





サンタクララ海外研修は「グローバル・リーダーシップ・プログラム」の中で行われる種々の活動のハイライトと位置付けている。参加生徒たちは、海外研修に行くまでの過程において、スカイプ交流をはじめとして自身の英語力や国際的な社会問題への関心を高めてきた。

上記意識調査の結果からも、海外研修参加生徒は「英語の有用性の意識」「国際的な社会課題に対する興味・関心」等において、２年普通科全体と比べて意識・能力ともに際立って高く、しかも伸び率が高いことが分かる。

また、「地元地域への貢献意識」は第１学年次から飛躍的に向上している。「国際社会への貢献意識」の伸びは大きくはないが、それでも２年普通科全体に対して大きく上回る数値である。これらの全てが、例年の海外研修参加生徒の意識の変容と同様な動きをしている。意識調査の結果からも、このプログラムを通して「国際社会へ発信できる力を養う」あるいは「将来グローバル・リーダーとして活躍する意欲や使命感を育むことができる」とした仮説は十分に実証できたものと考えられる。

③ＧＴＥＣスコアより

スカイプ交流、サンタクララ海外研修等「グローバル・リーダーシップ・プログラム」に参加した２年生のＧＴＥＣスコアの分布は以下のとおりである。

２年生サンタクララ海外研修参加生徒					
ｸﾞﾚｰﾄﾞ	ｽｺｱ	前回(H29.12)		今回(H30.12)	
		単純	累積	単純	累積
7	710～	0	0	1	1
6	610～	1	1	3	4
5	520～	5	6	7	11
4	440～	8	14	5	16
3	380～	2	16	0	16
2	300～	0	16	0	16
1	0～	0	16	0	16
スコア平均		506.1		567.4	

第２学年全体			
前回(H29.12)		今回(H30.12)	
単純	累積	単純	累積
1	1	3	3
4	5	19	22
47	52	89	111
164	216	141	252
93	309	44	296
6	315	5	301
0	315	2	303
468.3		502.7	

また、同じくＧＴＥＣスピーキングテストのスコア分布は以下のとおりである。

ｸﾞﾚｰﾄﾞ	ｽｺｱ	参加生徒		第２学年全体	
		単純	累積	単純	累積
7	170	2	2	9	9
6	150～	2	4	14	23
5	130～	5	9	102	125
4	110～	6	15	133	258
3	90～	1	16	38	296
2	70～			6	302
1	0～			1	303
スコア平均		137.4		126.3	

ＧＴＥＣスコアから見る海外研修参加生徒の英語コミュニケーション能力の高さは明らかである。第２学年全体と比較すると遥かに高いスコアを出していることが分かる。参加生徒１６人のうち１１人の生徒がグレード５（海外の高校の授業に参加できるレベル。高校卒業時の推奨グレード）に達しており、その割合は約７割になる（第２学年全体では４割弱）。

このプログラムに参加することにより、英語コミュニケーション能力を大きく伸ばしていることがうかがえる。また、２年生で実施したスピーキングテストに関しても、グレード５に到達している海外研修参加生徒は５６％を占めている。参加生徒は事前にスカイプによる現地高校生との交流活動にも参加している。また、参加生徒の多くが英語４技能育成プログラムを受講している（それぞれの報告を参照）。これらの活動も相乗的な効果を生み、英語学習への意欲が高まって４技能がバランスよく伸びたと考えられる。

また、第１学年次からのスコア平均の伸びについては、海外研修参加生徒は６１．３ポイントと非常に大きな伸びを見せている。第２学年全体についても、伸びも３４．４ポイントとめざましいものが見られた。海外研修が英語力向上の刺激になっていることは間違いない。

＜今後に向けて＞

これまでの取組から、サンタクララ海外研修を中心としたこのプログラムは「国際社会へ発信できる力を養う」うえで、また「将来グローバル・リーダーとして活躍する意欲や使命感を育む」うえで、非常に有益であると言える。また、本年２月に実施した第２回運営指導員会の場でも、経済的負担はかかると思うが、それに見合った人生の糧が得られるものであり、肌身で感じた異文化の体験は代えがたいものであるとして、ぜひこの研修プログラムを継続していくよう、指導を受けた。

費用の面などで検討すべき点は多いが、来年度以降もこのプログラムを継続し、必要な改善を図りながらよりよいものとしていきたい。